
RED

ロヒー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RED

【Nコード】

N3420V

【作者名】

ロヒー

【あらすじ】

意志の力『^{ウィル}意力』が存在する異世界アース。大戦と呼ばれる長く続く争いの時代の終わりに『魔人』と呼ばれる異形が現れ、大陸は恐怖のどん底に陥っていた。しかし、何処からか現れた赤髪の青年の犠牲により、魔人は倒され、大陸に平穏が訪れた。

――月日は流れ、100年。

大陸中央アークシティから物語は始まる。

※以前書いたものの設定を変えて、再掲載しています。

第0話 英雄と魔人

我々が住む世界とは異なる別次元の世界——アース。

1つの大陸と、僅かな島々によって成り立つこの世界の人々には不思議な力があつた。

己の意志の力を操る力。

ある者は腕に意志を集中させることで大岩を砕き、ある者は足に意志を集中させることで馬よりも速く駆け抜け、ある者は武器に意志を伝わらせることで武器の力をより強固な物とした。

いつしか、人々はその力を意力ウィルと呼ぶ様になった。

その力は人々の暮らしを大きく変えた——人の心さえも。

力を善に使う者も居れば、悪に使う者も居る。

いや、悪の方が圧倒的に多いだろう。

一度、悪に傾けば善に戻ることは難しい。

特に為政者達にとって、この力は使わずには居られなかった。

——支配欲の為に。

意力を使った戦争——大戦。

常識を越えた力のぶつかり合いにより、大陸を統治していた大小様々な国家が地図から名前を消した。

人々は恐怖した。

己の内にある意志が、簡単に一国を滅ぼすことに。

それでも、戦いは終わらなかった。

強大な力に溺れた為政者達の欲は、留まることを知らなかった。

終わらぬ悪夢。

苦しむ、力無き人々。

荒廃していく大陸。

——— 転機が訪れたのは、突然だった。

大戦後期——— 大陸が3つの大国に支配される様になって暫く過ぎた頃。

悲劇は大陸西側から始まった。

西側を支配する大国が僅か一晩で壊滅。

国の頂点——支配層は全滅。

調査に向かった二大国の調査団が見たもの——無残な姿に変わり果てたかつての敵対国と、恐怖に慄く民衆。

民衆の殆どが恐慌状態だった。

目の当たりにした『恐怖』で、精神に異常を来たしていた。

根強く事態の真相を調査する調査団は、比較的恐慌状態が治まった1人の老人の口からある情報を齎された。

黒い——誰が見ても理解出来る、黒い光を纏う男が何処からか出現したという。

黒い光——それは意力だった。

意力の強さは個人によって異なるが——身体から放たれる色は常に白いとされていた。

だが、男の纏うのは黒い意力。

明らかに、従来の意力には無い異質な『何か』を感じさせた。

男が向かったのは、国の中枢。

つまり、支配層が居る王城だった。

老人はそこまで話すと、身震いし始める。

どうやら、その後のことは口にするだけでも恐ろしいのか、話してくれなかった。

調査団はこれ以上の追及を諦め、去ろうとした。

去りゆく調査団に対し、震える老人は最後にこう言った。

「自分達の国のお偉いさんも、あんた等のお偉いさんも鬼だった。人を踏み台にすることしか考えていない鬼だ。だが、あの黒い男は——そんな鬼すら超える魔人だ」

——魔人。

名前の分からない黒い意力を持つ男は、そう呼ばれることになる。

魔人討つべし——いがみ合っていた二大国は目先の脅威を打ち倒すべく、手を結ぶことにした。

国の代表者達は、早速自国でも指折りの戦士達を集めた。

いずれも強い意力を持った猛者の集まり。

如何に強大な意力を持つ相手でも、迎え撃つのは二大国によって構成された精鋭100人の連合部隊。

為政者達は勝利を確信した。

だが、その期待は裏切られることになる。

部隊結成から数日後、連合部隊が魔人らしき男を発見。

その情報が二国に伝わった。

連合部隊の中には、戦場の映像を送る通信兵も同行していた。

カメラから送られて来た映像に、魔人と思わしき男は確かに映っていた。

情報通りに黒い意力を纏っている。

年齢は20代——真白い髪と黒い肌という正反対の色を併せ持つ。

しかし、それ以上に注目すべき点があった。

——目だ。

魔人らしき男の目は、常人とは明らかに違う。

眼球がどす黒く、瞳の部分は真っ赤な——まるで血の様な色。

映像を見ていた何人かは、その異形の姿に吐き気を感じた。

ここではない、遠距離から送られてきた映像に映っているだけの存在でしかない。

それにも関わらず、吐き気を感じる程の重圧が襲ってきているのだ。
通信兵から連絡が入る。

連合部隊——攻撃開始。

二大国の腕利きの猛者達が魔人を包囲する。

魔人は、その場から動こうともしない。

猛者達から、一斉に意力が放たれた。

いずれも常人が受ければ、原型を留めない肉の塊に変える威力を誇る。

——常人ならば、だ。

相手は常人では無い——魔人。

意力は、魔人に全て直撃した。

衝撃で砂煙が舞う。

映像越しの執政者達が、ほくそ笑む。

その顔が恐怖に歪むのに、時間は必要無かった。

砂煙が、突然の突風で掻き消され——同時に連合部隊の10人の首も消えた。

否、消えたのではない。

時間を置いて、何かが上空から落ちて来る。

——首だ。

連合部隊の精鋭10人の首。

砂煙が晴れた先には、両手を血に染めた魔人の姿があった。

魔人は笑っていた。

その笑みは——人によってはまるで無邪気な子供の笑顔にさえ見える。

戦慄が、現場と映像が送られてくる側の両方に奔った。

連合部隊の1人が突撃する。

声を上げながら、後先考えずに。

彼は目の前で起きた恐怖に、完全に我を忘れていた。

突撃した彼は、魔人に向かってありったけの意力を込めた剣を振り下ろした。

激しい音が聞こえ——剣が粉々に砕けた。

魔人には傷一つ無かった。

魔人が突撃した精鋭の顔を指先で弾いた。

鈍い音が聞こえて、彼の頭は弾け飛んだ。

頭を失った身体はそのまま地に伏した。

その光景を見た連合部隊の精鋭達は叫び声の様な悲鳴が上げ、魔人から離れていく。

その姿はもはや精鋭ではない、唯の一般人と大差が無い。

魔人が彼等を逃がす筈が無かった。

通信兵から送られてくる映像には、恐怖に顔を歪めながら虐殺される精鋭達の姿が映し出される。

映像を送っていた通信兵も耐え切れず、とうとうカメラを捨てて逃げ出した。

カメラは地面に落ち映像が途切れた——が、音声はまだ聞こえてくる。

最後に通信兵の断末魔の叫びが聞こえたところで、完全に通信は途絶えた。

通信が流れてきた側——為政者達は既に居なかった。

彼等は逃げ出すことを決意したのだ。

国も民も捨てて——己の保身だけの為に。

国のトップが消え、二大国が混沌と化するのに時間は掛からなかった。

大戦末期——三大国事実上の瓦解。

その真相は魔人に恐れをなした為政者達の逃亡という、あまりにも身勝手極まりない行為が原因だった。

混乱する両国に、魔人は当然の様に現れた。

誰もが恐怖に震える。

笑みを浮かべながら、魔人は民衆達にゆっくりと近付いてくる。

一歩、二歩。

逃れようの無い結末が、近付いてくる。

逃げることなど適わない。

逃げても無駄だと頭が先に理解していた。

受け入れるしかない、死という結末を。

だが、その結末は訪れなかった。

魔人の行く手を遮るかのように、1人の青年と1人の少年が歩み出てきた。

青年と真っ向から対峙した瞬間――魔人の笑みが消えた。

青年の顔はよく見えなかったが、年齢は20代そこそこ。

炎の様に赤い髪と真っ白なロングコートは、見る者に強い印象を植え付けた。

少年の方は12歳かそこらといったところか。

魔人を前にしても、何ら気後れしていない。

「奴は俺が止める。早く逃げろ」

青年が人々に呼び掛ける。

魔人が青年に拳を繰り出した。

青年は、魔人の拳を苦も無く受け止めた。

人々の顔が驚愕に変わる。

二大国の連合部隊を虐殺した魔人の拳を、目の前の青年は確かに受

け止めたのだ。

「行け！」

青年の力強い声に押され、人々は逃げ出した。

否——1人だけ逃げ出さない者が居た。

青年の連れの少年だ。

少年はある程度離れた場所まで退避し、魔人と青年の戦いを見ていた。

魔人と青年は拳を繰り出し、ぶつけ合っていた。

一撃ごとに衝撃波が起きる。

少年は逃げ出さなかった。

この戦いを見届ける姿勢を取っていた。

魔人と互角に渡り合う青年。

どう考えても、常人ではない。

普通ならば、魔人にも劣らぬ恐怖を抱いても無理はない。

だが、彼だけが希望だ。

彼ならあの恐ろしい魔人を倒せるかもしれない。

人々は一縷の望みを、名も知らぬ青年に託した。

——激闘は3日にも及んだ。

魔人も青年も、息を切らしていた。

周囲は瓦礫に変わり、草木一本見当たらない。

魔人からは黒い意力が、青年からは赤い意力が立ち昇る。

青年のそれも魔人同様に常識ではあり得ない色素の意力。

どちらも完全に人智を越えた膨大な量。

その全てが2人の右腕に集束されていく。

獣のような咆哮を上げながら、2人は同時に地を蹴った。

——黒と赤の激突。

その瞬間、世界は大きく揺れた。

爆発の様な閃光が起こり、少年は目を閉じた。

何も見えない光だけの世界が、数秒続いた。

やがて、光が収まる。

そこに2人の姿は無かった。

残ったのは、荒れ果てた街並みと——奈落まで続きそうな深い大穴だった。

数週間が過ぎ、廃墟同然の街に英雄の同行者だった少年が現れた。

彼は人々に語った——魔人はあの人倒した、と。

人々は魔人の脅威が消えたことに歓喜した。

名も知らぬ赤髪の青年に感謝した。

彼の尊い犠牲で大陸は救われたのだ。

魔人から大陸を救った青年は、人々から敬意を込められ『赤き英雄』と呼ばれる様になる。

街は荒れ果てたが、命がある。

人々は新しい生活に向けて歩み出す。

それから更に数ヶ月が過ぎた頃——復興作業をしている人々の前に、ある連中が現れた。

役立たずの為政者達。

魔人が居なくなつたので、再び支配者として姿を見せたのだ。

誰もが彼等を憎悪の瞳で睨んでいた。

憎悪は程なくして殺意へと変化する。

圧政で家族を失ったと大声を上げる青年が、ありったけの意力を為政者の1人に放つ。

意力を受けた為政者は呆気なく死んだ。

呼応する様に、周囲の人間達も意力を為政者達に放った。

何もしてくれなかった癖に。

逃げ出した裏切り者め。

血の粛清が行われた。

身勝手な為政者達の死により、長い長い悪夢の日々——大戦は終結した。

粛清事件後、国家という存在は完全に無くなった。

大陸各地には大小様々な町が相次いで建設。

政治体制は各々の都市や町による自治が主流となった。

その中の大陸西側レダンシティ、大陸中央アークシティ、大陸東側グロウシティ。

大陸の中心ともいえるこの三大都市は、大戦の教訓から平和条約を結んだ。

平和のシンボルとして、アークシティに1つの銅像が建てられた。

赤き英雄の銅像。

この銅像を中心に、平和記念公園も作られた。

——月日は流れ、100年。

大戦終結100周年を迎える現在、物語はアークシティから始まる。

第0話 英雄と魔人（後書き）

キャラが殆ど出てないので書き辛かったです（汗）。
次回からメインキャラ登場です。

第1話 邂逅

アークシティ。

大陸中央に栄える大都市。

三大都市の中でも最も発展しており、人や物が多く集まる。

この街は大きく5つの区画に分けられる。

住宅が密集する東区。

商業で賑わう西区。

防衛の要、警備隊の本拠地である南区。

移動の足、空港のある北区。

行政機関、教育機関が集まる中央区。

さて、物語は商業が集う西区から始まる。

大戦終結から数えて100年目にあたる今年。

各都市では100周年を記念して、3日間に渡って盛大な記念祭が行われている。

今日はその最終日。

アークシティは特に活気に満ちていた。

——100年前、この地で繰り広げられた死闘。

今や御伽噺の類とされる、赤き英雄と魔人の戦い。

ここはその戦場跡に作られた都市だ。

無論、観光客も多い。

商業で賑わう西区には当然の様に、人が集中していた。

その中でも、一際人が集中している店がある。

アンダーソン食堂。

食堂にしてはなかなか大きいこの店。

入り口には20人や30人では利かない人数が並んでおり、長蛇の列を作っていた。

「いらっしゃいませー」

入ってきた客に掛けられる声。

声を掛けたのはウェイトレス姿の少女。

年齢は16歳くらいだろう。

銀色の髪と翠の瞳、妖精の様な風貌をしたその少女は男女問わず注

目的だ。

「アンリさん、これお願いします」

「はい」

銀の少女——アンリは、店長から配膳を頼まれる。

甲斐甲斐しく仕事する姿に、誰もが見とれていた。

更に客の列が増える食堂。

そこに——。

「アーン♪」

「ひゃあ!？」

いきなり後方から、アンリに抱き付く人物。

長い黒髪をポニーテルにした少女。

年齢はアンリと同じくらいか。

「リナちゃん、いきなり抱き付かないでよ」

「よいではないか、よいではないか」

リナと呼ばれた少女はスリスリしてくる。

「リナちゃん、アンリちゃん困ってるっスよ？」

うら若き乙女2人に声を掛ける男が1人。

ぼさぼさのオレンジ色の髪。

額に巻いているバンダナはトレードマークに見える。

どうやら2人の知り合いらしいが……。

「あ？親友とのラブラブタイム中に何話し掛けてんだ、コラァ♪」

「ヒイヒイヒイッ！すんませんでしたアアアアア！！」

リナのドスの利いた声と睨みに、即座に土座するオレンジ頭。

「ハハハ、今日もストレートですねえ、リナさん」

「こんにちは、フィリップさん」

店長——フィリップはにこやかな笑みを浮かべながら、料理している。

彼は目の前の光景など、気にも留めていない。

いつものことだからだ。

「ジェイクくんもいつまで土座しないで立って下さい。お客さん困ってますよ」

「す、すみませんっス」

オレンジ頭——ジェイは通行妨害になっていた模様。

お客に平謝りする。

アンリは苦笑しながら、2人に尋ねる。

「ところで2人とも、今日はセイバーの仕事だったんじゃないの？」

「あれくらいちよろいわよ。パパーッと終わらせてきたわ」

「何せ期待の若手コンビっスからね、俺ら」

フフーンと、胸を張る2人。

——セイバー。

それは大陸各地の都市や町、村などに支部を持つ治安維持組織である。

分かりやすくいえば、何でも屋みたいなもので、依頼を受けて成功時に報酬が貰える仕事。

また、セイバーは意力の特殊訓練を受けられる数少ない組織の1つである。

大戦の教訓で、むやみに意力を戦いに使うのは禁止され、治安維持組織以外で学ぶ事は出来ないのだ。

一部では賞金稼ぎと陰口を叩く者もいるが、警備隊と並んで重視される存在である。

一般的に15歳から資格試験を受ける事が可能で、合格すればセイバーになれるのだ。

リナとジェイ——この2人も1年前に合格してセイバーとなった。

しかし、アンリは不安を感じていた。

セイバーは仕事上、犯罪者と戦う事も前提としている職業。

殉職する人間も出るのだ。

友人達がそんな危険に関わるのを、アンリは恐れていた。

「頑張るのもいいけど、無理しないでね」

「平気平気。それはそうと……」

リナがアンリの背後に回り込む。

シュルシュルという音と共に、アンリのエプロンの紐が解かれた。

「ちょ、リナちゃん？」

「最終日なんだからお出かけよ、お出かけ。アンタの事だからずっとフィリップさんの手伝いしてたんでしょ？」

「それはそうだけど……こんな忙しい時間に抜けたら大変じゃない」

時間は昼。

一番忙しい時間帯だ。

抜けたらフィリップとて困るに違いない。

だが……。

「いやいや、大丈夫ですよ。流石に3日連続だと疲れたでしょう？
後は私だけで捌きますよ」

「え！？で、でも……」

「そうですねえ、何かおみやげでも買ってきて下さい。それで手を打ちましょう。ジェイクン、リナさん、後をよろしく♪」

「「アイサー！」」

「ちょ、あああああああ！！？」

2人はアンリの手を握ると物凄い勢いで引っ張っていった。

客も唾然とした表情でその様子を眺めていた。

西区、平和記念公園。

赤き英雄の銅像近くのベンチ——アンリ達はそこに腰掛けていた。一通り祭りを楽しんだので、ベンチでまったりタイムといったところか。

近くには銅像の写真を撮る観光客の姿も見られる。

「相変わらず多いわねえ、英雄さんのファン」

「だってあの人のおかげで今の三大都市があるみたいなものだし」

「西区の観光スポットっすからねえ」

100年経った今でも、赤き英雄は人々から尊敬される存在だった。建てられた銅像には顔が刻まれていないが、これは彼の顔を見た者が誰も居ない為である。

赤き英雄には同行者だった少年が居たが、その少年は忽然と姿を消したという。

ゆえに、銅像の英雄には顔が無いのだ。

ある意味この方がいいという声もあるので問題は無い。

「ま、それはそーとして。アーン♪」

「ちょー！いくら何でもそれは！」

リナはスティック状のお菓子を口移ししようと試みる。

恥ずかしい上に同性なので流石に拒むアンリだが、向こうはお構い無しだ。

「アンリちゃん食べないんスカ？なら、オレが……ゴフォォ！？」

不埒な真似に走ろうとするオレンジ頭に鉄拳が突き刺さった。

地面に倒れるジェイ。

鉄拳を放ったのはもちろんリナ。

身体全身から怒りのオーラが立ち昇っている（笑）。

「何食おうとしてんだ、コラァ♪まさか、そのままあたしとキスしようなんて魂胆じゃないわよねえ？」

「え、いや、その……」

「返答に迷った時点でその気アリと見たァァァァァァ！お仕置きじゃァァァァァァ！」

「ギャァァァァァァ！」

地面に倒れたジェイに容赦なしの蹴りの雨嵐が降り注ぐ。

だが、変化が訪れる。

最初は痛がっていたジェイの顔が変わってきている。

苦痛に歪んだ顔から、いい笑顔に。

「そんな蹴っちゃダメっスよ！快感に目覚めるっスよオオオオオオ
」

「とっくに目覚めてんだろーが、このドMオレンジイイイイイイイ
」

「あはは……」

2人のやり取りを見ながら笑うアンリ。

目は笑っていないが。

不毛な争いが続く中、彼女の視線が赤き英雄の銅像に向けられる。

「（英雄、かあ………そういえば、『あの人』も憧れてたな）」

英雄の銅像を見つめながら、アンリは昔の事を思い出していた。

——10年ほど前。

アンリは1人の少年と一緒に本を読んでいた。

本には赤い髪の青年が写っていた。

ただし、顔ははっきりと描かれていない。

「おにーちゃん、このひとだれ？」

「この人は昔この大陸を救った英雄なんだ」

「えいゆー？」

「僕の憧れの人なんだ」

「じゃあ、おにーちゃんがえいゆーになったらアンリもまもってくれる？」

「もちろん。アンリを守ってあげるよ」

少年は優しく微笑んだ。

「アン？な、何泣いてんの？」

「―――！」

意識が今に戻る。

何時の間にか、涙が零れていた。

昔のことを思い出したからかもしれない。

「は、ハンカチ……って無い！どうしよう！？」

「リナちゃん、落ち着いて。別にこのくらい」

「このくらいじゃないわよ！女の涙は海より深いのよ！！今すぐハンカチ買って来るから！ジェイ、アンに変なことすんじゃないわよ！」

「ちょ、ちよつと―――！？」

リナは必死の形相で、その場から駆け出した。

観光客の中には、彼女の形相に腰を抜かすものが居た。

自分の事を気遣ってくれるのもいいが、あの性格はどうにかならないものか。

「リナちゃんも相変わらずっス。アンリちゃんの事になるとすぐこれだから。オレにもあれくらい優しくかったらいいのに……」

「でもいつも一緒でしょ？ 信頼してなきや側に居ないって」

「優しいフォローありがとうっス！ ついでにアンリちゃんの胸で泣かせて欲しいっス！！」

「いいけど、リナちゃんに血の海に沈められると思う」

「すんません、調子に乗り過ぎましたアアアアアア！！」

血の海という単語にマジに震えるバカ1名。

必死に土座する光景に白けるアンリ。

それと同時にだった。

爆発音が聞こえたのは。

「な、何！？」

「爆発！？」

一体、何が起きたのか。

周囲を見回すと——地面に大きな穴が開いている。

地面は大きく抉れ、爆発の被害で怪我をした人が多数倒れていた。

それどころか、中には。

「——っ！」

明らかに死んでいる人間も居た。

肩が震えた。

アンリにとって死という現象は大きなトラウマだった。

家族を失った時を思い出させるから。

目の前の景色がグニャグニャと歪む。

意識を手放したくなる。

「アンリちゃん！気をしっかり持つっスよ！」

その声になんとか自分を保った。

肩は震えたまま、汗は噴出していたが。

そこに——。

「アン、ジェイ！」

リナが険しい顔で走って来た。

容易ならざる事態。

2人が心配になって急いで戻って来たのだろう。

「一体、何があったんスカ!？」

「テロリストよ!」

「テロリスト!？」

大戦という悲劇の教訓からか、三大都市が誕生してから戦争が起きた経験は無い。

だが、必ずしも平和を望む者ばかりではない。

人間の中には現状を疎む勢力があるのは当然。

三大都市の統治を拒む組織があっても可笑しくは無い。

規模は大小様々だが、テロを起こす組織は多数存在する。

「上に注意して!」

上——空。

そこには、飛行船の姿があった。

正規の飛行船とは明らかに異なる、武装された飛行船。

飛行船の武装化は都市の防衛組織以外では禁じられている。

あんな物を有するとは、明らかに大きなテロ組織だろう。

先ほどの爆発音も、あれから爆弾の類が投下されたに違いない。

「とにかく避難して！」

「う、うん！」

だが、それは出来なかった。

そこに響く轟音。

落ちて来たものを見て、背筋が凍り付く。

武装したテロリストだ。

「我々はこの腐った統治体制を改革する使者『デューク』だ！抵抗する者は容赦せん！！」

デューク——その名は世間でよく知られている。

数多くあるテロ組織の中でも最大の規模を誇る組織。

かつて存在した三大国。

為政者の殆どが血の粛清によって殺されたが、一部の者達は生き残り、その子孫が運営しているとされるのがデュークだ。

テロリスト達は公園内の様々な物を撤去、あるいは破壊し始めた。

「―――！」

アンリの視線に1つの光景が映る。

赤き英雄の銅像が、破壊されようとしていた。

それを見た途端、アンリは走っていた。

「アン！？」

「アンリちゃん！？」

彼女の突然の行動を止めようとするが。

今度はリナとジェイの前にテロリスト達が落下して来た。

まるでアンリとの間を通さない壁の様に。

「邪魔よ、アンタらア！！」

「ぶっ飛ばす！！」

2人はテロリストに向かっていった。

あれは、『あの人』の憧れの人。

ずっと夢見ていた存在。

幼い頃の自分と『あの人』を繋ぐ絆だった。

今にも破壊されそうな銅像の前にアンリが立ちはだかる。

銅像を守る様に、両手を広げた。

「邪魔だ、小娘！そんな邪魔な像などいらん！」

「邪魔なんかじゃない！これは、この人は『あの人』の夢なんだから！！！」

「夢だと？笑止、我々の築く秩序こそが夢！！！」

「そんなの夢じゃない！ただの妄言よ！」

「言わせておけば調子に乗るな、小娘があっ！！！」

テロリストの拳がアンリを殴り飛ばした。

殴られた衝撃で後ろに飛ばされ、地面に転がるアンリ。

今度こそとばかりにテロリストは銅像の方に——向かえなかった。
アンリがテロリストの足にしがみ付いてきたのだ。

「させない、絶対に……」

「余ほど死にたいらしいな……」

テロリストの堪忍袋の緒は完全に切れた。

腰に差しているナイフを抜く。

その光景を、リナとジェイも捉えた。

「リナちゃん！」

「分かってるわよ！でも、数が多過ぎる！！」

2人の前に立ちはだかるテロリストの数は30人ほどか。

しかも全員が強固なプロテクターの様な物を装備している。

このままではアンリが殺される。

しかし、そう簡単に助けに行けない。

「さっさとあの世にいけえ！！」

テロリストのナイフが振り下ろされる。

「アン、逃げてええええええ！」

「くそおおおおお！！」

到底間に合わない。

助ける事など出来る筈が無い。

迫ってくる凶刃。

息が出来ない。

目を背ける事も出来ない。

怖
い。
○

死ぬ。

嫌だ。

死にたくない。

刹那の瞬間、アンリの頭にはあの時の言葉が浮かんでいた。

『もちろん。アンリを守ってあげるよ』

英雄になって、自分を守ってくれる『あの人』の言葉。

助けて。

無意識に助けを求めていた。

「助けて、お兄ちゃん——！」

——同時だった。

辺りに閃光が奔ったのは。

数秒後、光は消える。

「——？」

一向に下りて来ない凶刃。

おそるおそる目を開くとそこにあったのは——1人の男の後姿。

炎のような赤い髪を靡かせた、白いロングコートを纏った男が立っていた。

それだけではない、男はテロリストのナイフを人差し指と中指だけで止めていた。

「だ、誰!？」

「何処から現れたんスカ!？」

突然の来訪者。

ジェイもリナもただただ驚くしかない。

それはテロリスト達も同様だった。

一体、誰だあの男は？

「何だ、貴様！どこから現れた！？」

テロリストは突然現れた男に尋ねるが。

「――」

男は無言のままだ。

「ええい、邪魔だ！どけ！」

テロリストはナイフに力を込める。

そのまま強引に斬ろうとするが動かない。

指2本だけで止められているというのに、ナイフは全く動かないのだ。

――と、ナイフを止めている男の指先に白い光が集束される。

「こ、これは――！」

「――意力」

アンリが呆然と呟いた。

意力、それは大戦の発端となった力。

己の意志を操る能力。

使いこなせば、たった1人で百人力ともいえる力を得られる。

男は無言のまま、指先を曲げる。

同時に、ナイフが粉々に砕け散った。

「おのれ！」

武器を失い、今度は素手で向かうテロリスト。

拳が繰り出される。

が、男はやすやすと受け止め——そのままテロリストを天高く放り投げる。

「おおおおお！？」

叫び声を上げながら上空に舞うテロリスト。

——その更に上。

赤髪の男が出現した。

「——え」

何が起こったか、理解出来なかった。

何故、この男が自分の上空に居るのか。

その疑問は解けなかった。

赤髪の男の踵落としがテロリストに叩き込まれる。

「――っ」

声にならない叫びを上げ、テロリストは地に伏した。

何事も無かった様に着地する赤髪。

その姿は、その強さは――。

「――英雄」

そう、アンリには見えた。

あの赤髪の男は、兄が夢見た英雄そのものだった。

「何、あれ――？」

「動きが……まるで見えなかったっス……」

ジェイもリナも、その場に居たテロリスト達も啞然とした表情で男を見ていた。

男はアンリの前に来た。

ようやくはつきりと男の顔が分かる。

年齢は20代半ばくらいだろうか。

端正だが、精悍さが伝わってくる顔立ち。

青い双眸は、海か空を連想させた。

男が話し掛けてきた。

「おい、あんた。ここは何処だ？」

「え？こ、ここはアークシティですけど？」

「アークシティ？」

何か考え込む男。

「あ、あの——助けて頂いて有難うございます。お、お名前を」

「名前……？俺は——シオン。シオン・ディアスだ」

赤髪の男——シオンは拳を構えた。

仲間がやられたのを見て、他のテロリストが集まって来たらしい。

「邪魔だ」

シオンの身体から白い光——意力が立ち昇った。

テロリスト達は即座に相手の危険性を察知した。

1人が通信機らしき物を使用、何処かに連絡を入れようとした刹那
——シオンの姿が消える。

吹っ飛ばされるテロリスト達。

全員が同時に倒れる。

またしても何が起きたか分からない。

アンリはただただ呆然と見ているだけだった。

「アン、大丈夫!？」

リナとジェイが駆け寄ってくる。

アンリはさっき殴られたのだ。

顔が少し腫れ、口元から血が流れていた。

「大した怪我じゃないが、一応医者に見てもらった方がいいだろう。
医者は何処に居る？」

「え、えっと……近くに病院が」

「案内してくれ」

西区、病院。

テロ被害に遭ったと思われる人間は多く、診察の順番が来るまで時間が掛かった。

「もう大丈夫だよ。大事に至ることもないだろう」

「有難うございます」

医者に治療を受け、リナ達もホッとした。

そこに、

「次は俺を診てくれ」

医師の前にずいと現れるシオン。

首を傾げるアンリ達。

彼は何処も怪我をしていない筈だが――。

「診てくれとは？何か病気かね」

「あまり大したことじゃないんだが——」

深刻そうに、彼は言葉を紡ぐ。

「名前と戦い方以外、何も思い出せない」

「「「——は!？」」「」」

トンデモ発言に、シオン以外は揃って間の抜けた声を上げた。

——某所。

『その男』は闇の中に居た。

年齢は16歳くらい。

男と言うよりは少年と呼んだ方がいいか。

何かの装置が設置されたカプセルの中に横たわっている。

そこに……。

「総帥」

長い黒髪を束ねた青年が音も無く現れた。

年齢は20代後半くらいか。

その声を聞いて、少年は重く閉じていた瞼を開いた。

「……状況は？」

「総帥の予定通りです。あの少女が『彼』を召喚する事に成功した模様です」

「長かった……あれから幾星霜。この日を待っていたよ」

総帥と呼ばれた少年は待ち焦がれた存在の出現に、涙を流した。

それはまるで――遠い昔に離れ離れになった家族との再会を喜んでいる様にも思える。

やがて涙が止まる。

「それで“あの人”は今どこに？」

「現在、あの少女を含めた4人で病院へ向かった様です」

「そうか……しばらく様子を見よう。下がっていいよ」

「はっ」

黒髪の男は一礼すると、幽鬼の様にその場から消えた。

「さて、と……」

少年は指先を動かす。

その先にはいくつかのボタンがあり、青いボタンを押した。

カプセルが開き、身体を起こす。

「……く！」

と、急に胸元を押さえる。

頬に脂汗が伝い、全身が震える。

数分が過ぎ、息を切らせながら呟く。

「……もうあまり時間が無い。1年……最悪の場合は数ヶ月が限界か」

大戦から100年が過ぎた時代。

記憶を失った赤髪の青年が齎すのは果たして……。

第1話 邂逅（後書き）

内容が大分変わりました。

やはり初期からギャグキャラを入れないと、動かしづらいです（笑）。

第2話 ツツコミを求める男

テロリスト騒動から一夜明けて——とある病院のとある病室。

この病室の患者——シオン・ディアス。

推定年齢23〜25歳、身長186cm。

身体的特徴——赤髪、瞳の色は青。

出身地——不明

家族構成——不明。

職業——不明。

追記——現在、記憶喪失。

「これが俺の現状か」

病院のベッドの上で、シオンは溜息を吐いた。

彼には記憶が無かった。

意識が覚醒した時、彼の目に入ったのは振り下ろされてくる凶刃。

それ以前——何をしていたのか分からない。

何処から来たのか、家族が居るのかさえも。

憶えているのは自分の名前と、戦い方だけ。

「それはさておき――」

徐にベッド脇のテーブルの上に手を伸ばす。

そこに置いてあるのは本の山だった。

タイトルは様々だが、その中の1つ――『馬鹿でも分かる社会常識』というのがあった。

どうやら単なる記憶喪失で済む事態ではない。

社会常識すら忘れているらしい。

「各施設の利用には、IDカードを使用――何だ、それは？」

全く覚えが無い単語に、首を傾げる。

シオンが知らないのは物語の進行上仕方ないので、説明させて頂こう。

この世界は三大都市によって統治されており、各都市の市民にはIDカードが配布されている。

まあ、平たく言えば身分証明証のことである。

これが無いと病院やら銀行などの使用が出来ないのだ。

しかし、この赤髪はその類を全く所有していない上に記憶喪失なのでIDカード自体を知らない。

「これが無いといかんというワケか。作成には——何か面倒なことをしなきゃならんのか」

何から何まで分からない単語だらけで、頭が痛くなるシオン。

ええい、戻れ記憶と頭を叩くが効果無し。

「やれやれ」

両手で顔を覆う。

前途多難、それしか頭に浮かばない。

これからどうするか。

そう考えながら、不意に呟く。

「——血の匂いがする」

顔を覆う両手から、そんな匂いがした様な気がした。

他人には分からないかもしれないが、自分は血生臭い。

記憶を失っているにも関わらず、身体が戦い方を憶えていた。

だから理解出来た——自分が人殺しである、と。

IDカードを持っていないのは、その所為かもしれない。

社会のはみ出し者、犯罪者の類の可能性もある。

「（……とりあえず、時間が経てば記憶も戻るかもしれん。今はそれに任せるしかないか）」

しかし、それ以上に。

今、シオンの魂が叫んでいた。

——欲しいと。

「（何故だろうか。無性に、そう誰かから無性にツツコミを入れて貰いたい）」

医師の後ろをアンリとフィリップが続いていた。

彼等の目的地はシオンの病室だ。

フィリップはアンリの命の恩人にお見舞いの品として、メロンを持参していた。

「先生、シオンさんはどうなんですか？」

「かなり重症だね。読み書きは問題ないが、それ以外の社会常識が理解出来てないレベルだよ」

重症もいいところだ。

これからの社会復帰に時間が掛かるだろう。

医師はふうくと眉間を押さえながら、深い溜息を吐いた。

この様子から、彼の苦勞が良く分かる。

目の下にある隈からして、徹夜でシオンに説明していたに違いない。

医師の鑑とは正に彼の為の言葉だ。

「さ、着いたよ」

シオンの病室前。

医師はノックした。

「シオンくん、入ってもいいかね？」

「ああ」

ぶっきらぼうな声が病室から聞こえる。

3人が入ってきて見たものは、ひたすら読書に集中するシオン。

本のタイトルは『お子様でも分かるルールブック』。

アンリも流石に汗を流した。

状況は聞いてた通り、かなり悪い。

あんなあからさまに人を馬鹿にした様なタイトルの本を読んでる時点で、彼の今後に一抹の不安を憶えた。

「ふむ。あれは私も昔読んだことがありますね。なかなか面白かったですよ」

「え!？」

叔父も読んだことがあったらしい――が、今は関係無い。

本を読んでいたシオンの視線が来訪者達に向けられる。

「あんたか。何か用か？」

女の子にあんたという呼び方はどうだろうか。

まあ、自己紹介してないから仕方ないかもしれないが。

「昨日は本当に有難うございました。そ、その」

「あ、これをどうぞ。昨日はアンリさんが大変お世話になりました」
言葉が詰まっているアンリの横から、フィリップがメロンを差し出す。

だが――。

「そんな物はいらん。それよりもツツコミを入れてくれ」

「「――は？」」

いきなりシオンが変な事を言い出した。

ツツコミ？

何故に？

「あの、シオンさん？」

「頼む、誰でもいいからツツコミを入れてくれ。このままでは死ぬかもしれない」

「ええええええええ！？」

何で！？という顔に変わるアンリ。

どうしてツツコミを入れないと死ぬのだ。

アンリは青い顔をして医者に向き直る。

「せ、先生！ツツコミを入れないと死んじゃう病気ってあるんですか！？」

「そんなもの見た事も聞いた事もないよ。シオンくん、いきなり何を言っとるんだね？」

「いや、何か俺の魂の奥底からツツコミを入れて欲しいという叫びが」

「……シオンくん、すぐに精密検査を行おう」

「なら、まずツツコミを入れてくれ。でなければ、梃子でも動かん」

真面目な顔でツツコミを要求してくる赤髪。

困った医者ハアンリの肩に手を置く。

「すまん、頼む」

「わ、わたしですか！？」

困惑するアンリ。

シオンは真剣な表情で、じーっと見つめてくる。

メツチャ期待してる。

後には引けない。

プレッシャーが圧しかかって来る。

相手は命の恩人。

意を決して――。

「何でツツコミを入れなきゃいけないのよ――――っ!!」

バシーンとシオンの胸を叩く。

……これでいいだろうか？

おそろおそろ、シオンの顔を窺う――と。

「……ぞ」

「へ？」

「いいぞ……いいツツコミだアアアアアア!!」

「ふええええええええ!!」

スゲー嬉しそうな顔に変貌する赤髪。

医者も驚いてその場にへたり込んだ。

フィリップは何事も無いようにハハハと笑っている。

シオンは情熱的な眼差しでアンリの手を握る。

「あんたならなれる！」

「何にですかアアアア!？」

「ツツコミ系妹キャラに！」

「そんなのイヤアアアアアアアアアアア！」

病院から悲痛な叫びが聞こえた。

翌日。

とりあえず退院する事になったシオンさん。

まあ、本当の理由は病院で大声を出すのが問題なので、強制的に退院させたのだが。

それはそうとして、問題が1つある。

シオンは記憶喪失。

住所不定。

住む場所が無いのだ。

「さて困ったな。どうするべきか……」

「そうですね。IDカードも無いし……」

「いやいや、それなら問題ありませんよ」

「「え？」」

フィリップの発言に、2人は同時に疑問の声を上げた。

「シオンくん、これを」

「何だ、これは？」

フィリップが差し出した物——どうやらカードの類だ。

シオンの写真が貼られ、色々と記入されている。

横から見たアンリが驚きの声を上げる。

「こ、これってIDカード!？」

「これが? どうしてあんたがこれを持ってるんだ?」

「いやあ、特別に発行して貰ったんですよ」

「再発行って、物凄く手続きが要るんじゃない?」

IDカードは身分証である。

紛失した場合は再発行に色々と面倒な手続きが必要だ。

1日やそこらで発行して貰える筈が無いのだが……。

「まあ、いいか。えーと、住所はアンダーソン食堂？ 一体、何処だ？」

「ちょ、叔父さん!？」

「いやあ、住所不定はアレですから。つい、ウチの住所を」

ついで済む問題なのか。

アンリはため息混じりにシオンを見る。

——彼は物凄い嬉しそうな顔でアンリを見ていた。

背筋が凍りそうになった。

「つまり、あんたと同じ家に住めるんだな！これでツツコミ系妹キヤラ育成に全力を注げる!!」

「いつそんな話になったの!？」

「ん？ 今だが？」

「勝手に決めないでええええええ!」

アンダーソン食堂。

アークシティの味処に1人の青年が住み着く事になった。

名をシオン・ディアス。

ツツコミに拘る赤髪のボケ。

彼の日常が色んな意味でスタートしようとしていた。

「色んな意味って何ー！？はっ、また突っ込んだじゃった！」

「いいぞ、その調子だアアアア！」

「うわーん！こんなのわたしのキャラじゃないのにー！ーっ！！」

「ハハハ、賑やかになりそうですねえ」

店長、少しは止めてやれよ（笑）。

第2話 ツツコミを求める男（後書き）

主人公はやはりバカなところがあってナンボだと思います。
単に僕が真面目タイプな主人公を書くのが苦手なだけです。

第3話 アンダーソン食堂

記念祭終了から3日後、早朝。

テロリスト出現もあり、街は連日警戒が強まったままだ。

セイバーや警備隊の数も日頃より多く見られる。

そんな街中を闊歩する2人。

ジェイとリナ——アンリの友人コンビだ。

「あれから3日——アン、今いくわよ！」

「あの後、連日で街の見回りしてたっスからねえ」

セイバーである2人は、街の警備に参加していた。

特に表立った行動を起こす連中は見掛けず、退屈だった。

ちなみにアンリに会いたいと駄々をこねるリナに八つ当たりを受けるなど、ジェイは貧乏くじを引かされっぱなしだった。

なので、今日はリナの機嫌が良くなるだろうと期待していた。

そんなこんなで、目の前にはアンダーソン食堂。

まだ開店前だが、このお嬢さんには関係ないことだ。

思いつきり、扉を開く。

「アン！会いたか——」

そこに居たのは、

「開店前だ。外で待っている」

ぶつきらぼうに掃除をする赤髪の青年——シオンだった。

——アレ？

何故、店の中にフィリップ以外の男が居るのか？

客では無い。

開店前だし、何より店の中を掃除している時点でおかしい。

「な、ななな」

「——？何だ、騒々しい奴だな？」

「何者——！？不審者が店の中にい！？」

「リナちゃん、この間の人っスよ！忘れたんスか！？」

胸倉を掴まれ、ぶんぶん揺すられる。

脳内震度6を記録——でも、これくらいで揺らぐシオンではなか

った。

「不審者はお前等だ。一体、何なんだこんな早くから」

「おはよ」

そこに絶妙のタイミングで寝巻き姿のアンリがやって来る。

「ア、アン……」

「あれ、リナちゃん？」

「す、すすす」

「す？」

「何て素晴らしき姿、あぶうううう！！」

いきなり鼻血の噴水。

折角、掃除していた床が血塗れに。

「おい、アンリ。何だ、この珍獣は？俺の苦勞が台無しなんだが」

「えーと……」

大量に流れる鼻血。

床でビクンビクンと痙攣するリナ。

ジェイはティッシュをリナの鼻に詰め込む。

「アンの寝巻き姿……グフフ♪」

「リナちゃん……女の子がグフフってのはどうかと思うっスよ」

「外に捨てていいか、これ？」

「だ、ダメです！」

「そうか、なら仕方ないな——チッ」

「「（舌打ちっ!?!）」」

やや黒いシオンさんであった。

鼻血で倒れたりリナの復活に約1時間を要した。

余程、アンの寝巻き姿の刺激が強かったのか——流れ出した鼻血の量が半端ではなく、輸血に時間が掛かった。

どうやって輸血したかは皆さんのご想像にお任せします（笑）。

「それで、アン。何であの赤いのがいるの？」

「赤いのって……（汗）」

赤いのとはシオンの事だ。

どうやらリナはシオンが気に食わないらしい。

赤いの——もとい、シオンは鼻血で汚れた床を丹念に拭き取っている。

ジェイも手伝っている。

一方のアンリはどう説明すればいいか、困り果てていた。

当の本人は同居人の事などお構い無しに掃除している。

「あ、あの人はね……」

さて、何と答えればいいのかやら。

閃光の戦士——却下。

流浪の旅人——大却下。

もっと現実的なものを——閃いた。

「記憶喪失の家無き子なの」

それを聞いたシオンはピタリと止まった。

何やら震えている様だ。

作業を手伝っていたジェイも困惑する。

「あーそういえば病院で記憶喪失って言ってたわね。しかも家無き子？」

「うん。色んな意味で可哀そうな人なの」

2人の会話を聞いていたシオンが隅っこでいじけ始めた。

オロオロしながら慰めの言葉を考えるが、いいアイデアが浮かばないオレンジ頭。

「でも、どうしてここにいんのよ？」

「ここに居候する事になったの」

「ああ、そう——ってはい!？」

リナ、思考開始。

居候。

1つ屋根の下。

男。

親友に付く悪い虫。

色々あつて押し倒される親友。

親友の貞操の危機。

思考終了。

……何やら話が飛躍し過ぎだが、彼女はそう結論した。

そして次に出た行動は――。

「死ねええええええええええ！！」

「ええええええ！？」

黒ホニ、飛翔。

赤髪の抹殺に乗り出したのだ。

隅っこでいじけるシオンに向かって飛び掛った。

「――殺氣!?」

いじけてたシオンも殺気を感じ取り、振り返る。

飛び掛ってくる黒髪ポニーテール——黒ポニーを認識した。

次の瞬間、彼は驚くべき行動に出た。

普通なら避けるものだが――。

「え？」

間の抜けた声を出すオレンジ頭。

赤髪の取った行動――それは非情なものだった。

自分に対して慰めの言葉を考えていていたオレンジ頭を盾にするという行為だった。

「キシャアアアアアアア！」

「ちょ、リナちゃ……ギャアアアアアアアアア！」

野生の獣と化したリナには何も聞こえなかった。

超高速で繰り出される拳打。

滅多打ちにされるオレンジ頭。

「ふう、危なかった」

「危なかったじゃない！」

アンリの右ストレート！

シオンの顔面にヒット！

アンリはレベルが上がった！

ツツコミが4上がった！

健気さが6下がった！

「何コレ！？どうしてレベルが上がってるの！？」

「くつくつくつ……健気さが下がってるなあ、アンリ」

「はっ！し、シオンさん……まさか！？」

「そう……その通り！俺がオレンジ頭を盾にしたのは黒ポニーから身を守る為ではないッ！！お前にツツコミを入れさせる為だ！」

ガガンという効果音が何処からか聞こえてきた。

本当にどっから聞こえてくんだよ（笑）。

つまり、アンリはシオンの策略に嵌められたのだ。

策略ってほどでもないが。

「これでまた1歩、ツツコミ系妹キャラに近付いたというワケだ、フハハハハハハ！」

「いーーーーーやーーーーー！わたしのキャラを変えないでええええええ
！！！」

悪役の様な高笑いをするシオンさん。

がつくりと項垂れるアンリ。

だが——シオンは気付いていなかった。

オレンジ頭が撃沈し、リナはそれを識別している事を。

「キシヤアアアア、これは赤いのじゃない。赤いのじゃない」

どうやらようやくフルボッコにしたのがシオンじゃないと気付いたらしい。

オレンジ頭は半死半生。

魂が抜け掛かっていた。

リナ、索敵モード。

視界に高笑いしている赤髪を発見。

傍で項垂れているアンリを確認。

「おのれ、アンを泣かせたなアアアア!!」

「ゴフオ!?!」

リナの鉄拳がめり込んだ。

どうやら完全に油断してたっぽいシオンさん。

そのまま床に倒れる。

「親友を泣かせるたあ、フテー野郎だ！お仕置きじゃあああああ
あ！！！」

「ぬあああああああ！！！」

マウントポジション＋滅多打ち。

血の海と化す食堂。

髪のみならず、全身が赤くなるシオンさん。

現在、再生中のオレンジ頭。

「（叔父さん、早く帰って来てえええええ）」

この場に居ないフィリップに助けを求めるアンリ。

地獄絵図のアンダーソン食堂。

こここの店主は何処に行ったのだろうか？

———某所。

真つ暗な場所をフィリップは歩いていた。

厨房に立つ時のコック姿ではなく、割とラフな服装だ。

普段のニコニコ顔ではない。

氷の様な冷たさを感じさせる目付き。

今の彼は料理人ではない。

例えるなら狩人。

獲物を狩るハンターとでも言えればいいだろうか。

やがて、歩くのを止める。

「久しぶりですね、かれこれ10年ぶりでしょうか？」

「ああ、お前が『引退』して以来だな」

暗闇から幽鬼の様に1人の男が現れる。

年齢はフィリップと変わらないくらい———40代かそこらだろう。

強面の顔と、顔の至るところにある傷。

子供が見たら確実に泣き出しそうな大男だ。

「お前がここに来るとは——何かあったのか？」

「ええ、少し気になる事がありましたね。……この青年の事を調べて欲しいんですよ」

フィリップが懷から写真を取り出す。

受け取る大男。

写真に写っているのは赤髪の男。

記憶喪失の居候の姿だった。

アンダーソン食堂に転がる死体が2つ。

いや、死んでませんけどね。

顔面がボコボコになった赤髪とオレンジ頭。

少し離れた席にアンリとリナは座っていた。

リナはティーカップに入ったお茶を啜る。

「ん〜〜〜いい味。アンが淹れてくれたお茶は格別ね」

「リナちゃん、現実から目を背けないで」

「……はい、ごめんなさい。やり過ぎました」

あの後、アンリが止めに入った事もあり、シオンは何とか九死に一生を得た。

と、起き上がる赤髪。

顔を擦っているあたり、やはり痛いのだろう。

まあ、顔面ボッコボコだから仕方ないのだろうが。

「やれやれ、えらい目に遭ったな。おい、オレンジ頭。お前の方は大丈夫か？」

「大丈夫なワケないじゃないスか。人を盾にしておいてよくもぬけぬけと……」

「……オイ、ちょっと待て」

「何スか？」

「お前、顔が……」

シオンは信じられない物を見るかの様な顔だ。

無理も無い。

ボコボコだったオレンジ頭の顔が綺麗さっぱり元通りになっているからだ。

「毎日リナちゃんに殴られてるっスからね。打たれ強さと再生能力なら誰にも負けないっスよ」

「打たれ強さはともかく、再生能力はどうかと思うが……」

目の前に居るオレンジ頭が人間かどうか疑わしい目で見る。

と、そんなどうでもいい事を考えてると……。

「こんちわ」

店の扉が開き、新たな来訪者が現れた。

第3話 アンダーソン食堂（後書き）

ジェイとリナは書いてて楽しいです。

そして、アホなシオンさんと被害者アンリも書いてて楽しいです。

次回、新キャラ登場！

第4話 雑貨屋ザッシュ

黒ポニーの大暴走。

まあ、アンの説得で何とか収まり、めでたしめでたし。

そんなところにやって来た来訪者。

やや長い金髪を赤い髪紐で結んだ青年。

年齢はシオンと同年代くらいに見える。

右脇に何か小包を抱えている。

人から見れば、軽薄そうな感じの男に見えるかもしれない。

だが、彼を見た瞬間、シオンの顔付きが変わった。

「（こいつ、俺と同じ匂いが——）」

自分と同じ匂い。

そう、血の匂いがした。

瞬時に理解する。

この男が自分と同類だと。

——人殺しであると。

警戒心を強めて男を見る。

男は小包を持ってアンリのところまで来る。

「あ、ザッシュさん」

「頼まれてた調味料持ってきたよ。フィリップさん居ないの？」

「出掛けてるみたい。何処に行ったんだろ？」

「そっか。あ、前に言ったんだけどさあ、僕の事は名前じゃなくて、『お兄ちゃん』で……んが!？」

男——ザッシュは最後まで言い終える事が出来なかった。

彼の言葉を遮ったもの。

黒いポニーテールの鬼であった。

彼女は物凄い笑顔で、ドス黒いオーラを纏っていた。

ザッシュは彼女にアイアンクローをかまされたのだ。

ちなみにリナ（大体、154cmくらい）、ザッシュ（180cmくらい）である。

ちっこいこの身体の何処に男1人を軽々と持ち上げるパワーがあるのだろうか？

「ねえ、ザツシュさあん♪今、あたしの親友に何しようとしたの？」

「いや、『お兄ちゃん』と呼んで貰いたいな〜って」

「このロリコンがアアアア！いい加減に懲りろオオオオオオオ！」

「いやだ！僕はアンリちゃんにお兄ちゃんと呼ばれるまで諦めない！！」

「キシヤアアアアアア！」

「んがあああああああ！！」

アイアンクローで極められながらも抵抗する金髪。

ミシミシという嫌な音が店内に響く。

そんな2人のやり取りを慌てて止めようとするアンリ。

シオンは最初に彼を見た時の抱いた警戒心が吹っ飛んだ。

白けた目で目の前の光景を見ながら、隣のオレンジ頭に尋ねる。

「おい、オレンジ頭。あいつは何なんだ？」

「え？兄貴の事っスか？」

「兄貴？あの金髪はお前の兄なのか？」

「違うっスよ。兄貴ってのは敬称みたいなもんスよ。兄弟じゃないっス」

「そうか。で、あいつは何者なんだ？」

「あの人はこの近くで雑貨屋をやってるザッシュさんっス。フィリップさんとは昔からの知り合いで、よく調味料を届けに来てくれるみたいっス」

「奴は何故、アンリに兄と呼ぶ様に迫っているんだ？」

「それがあの人の生き甲斐の1つだからっス。妹系を見れば、お兄ちゃんと呼んで欲しくて、女王様系を見れば、奴隷にしてくれって叫んでたっスからねえ」

「なるほど、ある意味で危険人物という事は理解した」

「ご尤もな意見です（笑）。

重い腰を上げ、シオンは騒動の中心に向かう。

ジェイを止めようとしたが、振り返りもしない。

「おい、お前等」

「」「へ?」「」

3人は一斉にシオンに視線を向ける。

そこには腕を組んだシオンさんの姿があった。

いきなり乱入してきたこの赤髪。

何が目的なのか。

「不毛な争いはやめろ。店内が荒れるだろう」

えらいマトモな意見をしてきた。

このままの状態が続けば、店が荒れるのは時間の問題だ。

アンリは目元にハンカチを当てた。

病院でのこの赤髪の行動には泣かされたが、今は頼もしく――。

「雑貨屋、貴様の言動は許せん。アンリをツツコミ系妹キャラに開発し、兄と呼んで貰うのはこの俺だ!!」

「違うでしょうがアアアアアアアア!!」

アンリの飛び蹴り!

シオンの顔面にクリーンヒット!

アンリはレベルが上がった!

ツツコミが11上がった!

キャラ崩壊が始まった!

シオンはいい笑顔で微笑んでいる！

「フハハハハ！やはりいいぞオオオオオ！！お前の本質はツツコミだアアアアア！！」

「あああああ！またしてもオオオオオオ！！？」

項垂れるアンリ。

そこに――。

「何がしたいのよ、アンタはアアアア！」

黒ポニーからも飛び蹴りをかまされた。

鼻から滝の様な鼻血が噴出し、そのまま倒れるシオンさん。

ザッシュは頭を掻きながら、アンリ達に説明を求める。

「えーと……誰、この人？」

「シオン・ディアスさん。記念祭の最終日にテロが遭ったでしょ？その時に助けて貰ったんだけど」

「しかも図々しい事に、ここの居候になってんのよ」

「何ですとオオオオオ！！？つまり、毎日の様にアンリちゃんにあんな事やそんな事を！？」

「何を想像しとんじゃ、おのれはアアアアアアアア！！」

「ギャアアアアアアア！」

不謹慎な発言をする雑貨屋にバックドロップをかます黒ポニー。

床に大きな穴が開いた。

アンダーソン食堂に人間が1匹生えた。

アンリは頭が痛くなってきた。

叔父にどんな言い訳をすればいいのだ。

こんな惨状を見られたらたまったもんじゃない。

とりあえず、少しでも片付けよう。

と、思った矢先。

「ただいま帰りましたよー」

最悪のタイミングで帰還する店長。

顔は笑顔のまま。

動きが止まる。

店の中が大惨事。

床から生えている雑貨屋。

鼻血噴いて倒れてる赤髪。

「皆さん、ちょっとお話ししましょうか」

「お、叔父さ……」

「いい訳はいりません。皆さん、床に座ってください♪」

この後、どうなったかは当事者達にしか分からない。

ただ、全員がげっそりとしていた。

よほど、こつてりと絞られたのか。

それとも別の何かがあったのか……。

しかも、全員に罰が与えられた。

アンリ、リナ、ジェイは店の手伝い（閉店までフルで）。

シオン、ザッシュは出前を届けに行かなければならなくなった。

時間は流れ、午後10時。

アンダーソン食堂は死屍累々。

正確には魂を燃やし尽くしたアンリ、リナ、ジェイが床に転がっていた。

「もう動けない……」

「ひくん……」

「お、終わったっ……ス」

対照的に、赤髪と雑貨屋はカウンター席に座っていた。

「いやあ、助かりましたよ」

「疲れた、慣れん事をしたな……」

「僕は楽しかったよ♪可愛いお嬢さんやら色気あるマダムとお話出来てよかったよ」

はふーんと鼻息を鳴らす雑貨屋。

出前先のお嬢さんやら奥様と会話出来てご満悦の様子。

店長はお茶を入れて、カウンターに出す。

シオンはジト目でザッシュを見る。

「（こいつからは確かに血の匂いがした……。一体、何者なんだ……?）」

出前の時も、常にザッシュの行動に目を配っていた。

何か不審な行為をしないか、と。

特にそんな素振りは無かったのだが、疑念はまだ晴れない。

シオンの気持ちを知ってか知らずか、話し掛けてくる雑貨屋。

「今日はお疲れ。まあ、一緒にティータイムといこうよ」

「……ああ」

気にはなるが、とりあえず疲れたのでお茶を啜る。

苦い。

しかし、彼にはこの苦さがクセになりそうだった。

「店長、これは何てお茶だ? いい味だ」

「お? シオンくんも緑茶派みたいだね」

「フッフ、緑茶同盟に1名追加ですねえ」

「店長、その名簿は何だ? 緑茶同盟って何だ!？」

何か店長がややイッてる目で何かの名簿を書き込んでいる。

その姿に不安を憶え、呼び掛けるが反応が無い。

果たして緑茶同盟とは何なのか。

まあ、どうせ名前だけの登場だけだろうが（笑）。

そんな2人を尻目にザッシュが席から立つ。

「さて、僕はそろそろ帰るかな。まだ『仕事』が残ってるし」

「（……『仕事』だと？）」

時刻は夜の10時過ぎだ。

こんな時間に何の仕事をするのだろう。

ザッシュはヒラヒラと手を振りながら食堂を後にした。

夜は更に深まり……深夜0時を過ぎた。

アークシティ西区、倉庫区域——別名『倉庫街』。

幾多の倉庫が並び、まるで街の様に見える様からこの名が付けられた。

ここではアークシティの品物は勿論、他の街の品物も多数保管されている。

しかし、ここに置いてあるのが正規の品だけとは限らない。

いつの時代でもいるのだ。

密輸に走る者が。

倉庫街の中でもとりわけ外れに位置する倉庫で、今正に密輸品の取引が行われていた。

人数は8人。

体格からして、全員が男。

顔を覆面で隠しているので年齢は分からない。

「ほう、これが例の……」

男の1人が密輸品を手取る。

銃器などの武器ではない。

紫色の液体が入ったアンプル。

薬品の一種だろうか？

見るからに不気味な紫色の液体は何か危険なものを感じさせる。

明らかに非合法薬物であるのは明確だ。

「ああ、新たに開発された新薬だ。これを使えば……」

「簡単に強い戦力が手に入るという事か」

「では、あの方々に渡しに行こう」

男達の口が歪む。

この薬物を用いて、何かよからぬ事を企んでいるのは明白だ。

1人が薬物をトランクケースに詰める。

早速行動に移るべく、動き出す男達。

だが——それは出来なかった。

ヒュンという、風を切る様な音が聞こえた。

何の音だ？

男達が周囲の様子を窺う。

が、次の瞬間。

8人の内、前方を歩いていた6人の首が消えた。

首が消えた身体から、血飛沫が舞う。

地に沈んでいく6つの肉塊。

同時、何かが上から落ちてきた。

6人の首だ。

その表情は何ら変化も無い。

殺された事にすら気付かずに逝った様だ。

残った2人は背後を取られない様に、背中合わせの格好になる。

全身から汗が噴出す。

何か、恐ろしい何かがここに居る。

ほんの僅かな時間で6人の首を切る何かが――。

「君達、それを渡してくれないかな？」

暗闇の中から男の声が聞こえてくる。

2人の身体が硬直した。

暗闇から聞こえてくる声の主。

姿が見えないが、背筋が凍り付きそうな殺気を放っている。

例の薬物が入ったトランクケース。

これを渡せば、命は助かるのだろうか。

否、そんな保証はない。

警告も無しにいきなり6人を殺した相手だ。

渡せば、自分達もあの世逝きに違いない。

かといって、たとえ命を助けられたとして、自分達に明日は無い。

この薬物が届くのを待つ者達が居る。

連中は自分達よりも上の立場の存在だ。

もし、これを渡した事が露見すれば、自分達は間違いなく殺されるだろう。

どちらも選べない。

なら、残る選択肢は1つ。

2人は懷から何かを取り出した。

紫色の液体が入ったアンプル。

例の薬物だ。

「何をする気だい？」

声の主の問いに、2人は答えなかった。

彼らはアンプルを開け、薬物を飲み干した。

液体が無くなったアンプルが地面に落ちる。

その場に蹲る2人。

身体をぶるぶると震わせている。

——そして、変化が起きる。

2人の筋肉がありえないほど隆起する。

着ていた上着が千切れた。

顔付きもまるで飢えた獣の様な凶悪なものに変貌する。

悪鬼とでもいえがいいのだろうか。

2人は、今にも獲物を食い殺す悪鬼へと化した。

「やれやれ……。連中もトンデモない代物を作ったねえ」

暗闇からその男は姿を現した。

左手に剣が握られている。

黒い刀身という、まるで夜を思わせる特徴的な長剣。

ピチャリピチャリと、何かが剣から滴る。

真つ赤な液体——血。

先ほど死んだ6人は、この剣で首を跳ね飛ばされた様だ。

「G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!」

叫ぶ2人。

もはや完全に獣。

理性の欠片も見られない。

「哀れだねえ。大人しく渡せば命は助けたのにさあ。ま、渡したら渡したで君ら殺されてただろうし。どっちでも同じかな」

男は冷めた目で剣を構える。

こうなった以上、この2人が元に戻る可能性は低い。

どの道死ぬのなら。

「樂にしてあげるよ」

今、ここで息の根を止める。

男の剣に白い光——意力が収束されていく。

真白い光の意力と、黒い刀身の剣。

相反する色が同居する。

「『黒雷』、参る」

男が地を蹴った。

2人も同時にだ。

獣の様な咆哮が、倉庫街に響いた。

アンダーソン食堂2階、シオンの部屋。

元々空き部屋だったが、シオンがここに住む事になったので部屋として使う事になった。

とはいっても、まだ家具らしい物はあまりない。

あるのはベッドとタンスくらいか。

時間が時間なので、流石のシオンも寝ていた。

だが、不意に瞳を開ける。

身体を起こし、周囲を見回す。

「何だ……？何かを感じる……意力か？」

ここから少し離れた場所から、意力がぶつかり合うのを感じ取った。

外で何かが起きている。

「何が起きてるかは知らんが、ここまで被害が及んだらアンリや店長が危険かもしれない」

まだ出会って数日だが、ここに住まわせて貰っているのには感謝している。

ベッドから出ると、タンスを開いて服装を整える。

着替え終わると窓を開け、跳躍。

そのまま地面まで一気に着地する。

「ここから少し西か……」

鋭い眼光で、何かが待つ西を見つめる。

漆黒の暗闇。

その中を、赤い風が駆け抜けた。

目指す場所は、西区倉庫街。

第4話 雑貨屋ザッシュ（後書き）

何かどんどん三枚目が増えてる様な気がします（笑）。
5話目以降は暫く時間が掛かりそうです。

登場人物

シオン・ディアス

年齢：推定23～25歳、186cm。

この物語の主人公かもしれない人。

閃光と共に出現した記憶喪失の青年。

名前と戦い方、意力の使い方以外は何も憶えていない。

一見するとクールに見えるが、意外とノリは良い方。

特にツツコミが絡むと無駄にテンションが高くなる。

アンリをツツコミ系妹キャラにすべく、色んな策略を企てている（笑）。

アンリ・アンダーソン

16歳、160cm。

叔父が経営するアンダーソン食堂に住む少女。

普段は調理学校に通う生徒で、授業が早く終わった日や休日は食堂の手伝いをしている。

ジェイ、リナとは幼馴染。

シオンの策で徐々にツツコミ系妹キャラになりつつある。

本人としては健気な妹キャラがいらしい。

ジェイ・レアリスト

16歳、170cm。

アンリ、リナとは幼馴染。

オレンジの髪をバンダナで逆立たせている。

通称、オレンジ頭。

余計な事をしてはリナに殴られる毎日。

その為か、異様に打たれ強い上に再生能力も高い（笑）。

リナ・アイランス

16歳、154cm。

アンリ、ジェイとは幼馴染。

黒髪をポニーテールにしている。

通称、黒ポニー。

やや百合の気があり、アンリへのスキンシップが過剰。
逆にジェイの扱いはぞんざい。

フィリップ・アンダーソン

40代、175cm。

アンリの叔父。

アンダーソン食堂の店長。

食堂をほぼ1人で切り盛りする恐るべき男。

いつもニコニコ顔だが、怒らせると怖いらしい（顔は笑ったままな

ので怖さ倍増)。
何かと謎の多い人物。

第5話 夜の出来事

激しい金属音が倉庫街に響く。

今、倉庫街の外れで対峙する三者。

1人は黒い剣を持つ男。

残る2人は筋肉が異様に隆起した異形の男達。

黒い剣を持った男が、1人に斬り掛かった。

普通ならば、相手が切り裂かれて血が噴出するのがイメージ出来るだろう。

相手が『普通』ならばの話だ。

剣は相手を傷付けた。

傷付けはしたが、出血量は微々たるもの。

よくある薄皮を少し切って、血が滲み出た程度にしか見えない。

「おいおい、いくらなんでも硬過ぎでしょうがこの筋肉マッチョさん——っ」と!

軽口を叩きながら、後方に跳躍する。

もう1人が男に目掛けて、拳を繰り出してきたからだ。

回避は成功し、男が元々居た場所に拳が叩き付けられる。

轟音が響き、地面に大穴が開いた。

「あつぶなー！馬鹿力もいいところだよ……うお！？」

間髪入れず、2人同時に突進してくる。

でかい図体の割りに凄まじい速度だ。

男は慌てずに左手を正面に広げる。

何故、避けようとしなののか？

答えは直ぐに出た。

けたたましい音と共に、異形の2人が何かに激突した。

男と異形達の間光の壁が発生している。

光の壁は、異形達の侵入を許さない。

まるで、黒い剣の男を守る壁の様に。

しかしながら、壁には少々の罅割れが見られる。

「即席で作った障壁とはいえ、罅が入るとはまいったねこりや——
——っ！？」

男の顔が急に強張った。

剣を構える。

彼の目に、異形達など映っていなかった。

「（来る……強い意力を持った誰かが。この2人よりも遥かに危険なものだ）」

この場所に近付く、恐ろしい何かに警戒心が高まる。

耳を澄ます。

足音が聞こえる。

何かがこちらに走ってきているのが分かる。

「（……誰だ？ 誰——）」

そう思ったと同時に。

異形達を阻んでいた光の壁が破壊されたのは。

轟音が鳴り響いた。

倉庫街。

多くの倉庫が並ぶ事からそう呼ばれるこの場所。

今、そこを駆け抜ける男が1人。

真っ赤な髪は炎、身に纏う白いロングコートは雪を連想させた。

男——名をシオン・ディアス。

アンダーソン食堂に住んで3日目の記憶喪失の居候。

外で何かの騒ぎを感じた彼は、その場所へと向かっていた。

——遠くで轟音が響くのが聞こえた。

走る速度を更に速める。

常人ではまるで追いつけそうに無い俊足。

同時に、シオンは自分の特異性に改めて気付かされた。

ここから食堂までそれなりの距離がある。

それなのに、自分は呼吸を殆ど乱していなかった。

——やはり、そうなのか。

心の中で納得した。

自分は単なる一般人では無いのだと。

手に染み付いた血の匂い。

何故か憶えている意力の扱い。

身体能力。

自分は、戦士なのだと理解した。

血で血を洗う様な場所を生きていたのではないかと。

ここを訪れたのは、アンリ達に無用な被害が及ぶかもしれないと考えての事。

だが、本心はそうだろうか？

戦いを、血を求めているのではないだろうか？

「（今、考えてる暇は無いな）」

今はただ走るのみ。

そして、自分の出来る事をやるだけだ。

——即ち、戦うのみ。

辿り着いた場所。

そこは爆発でもあったのか。

砂煙が舞い、周囲には碎け散った建造物やらの破片が散らばっている。

周囲に気を配る。

——居る。

砂煙の中に、何かが居る。

数は2つ。

やたらと大きな影が見える。

砂煙が晴れる。

現れたのは——筋肉が異様に隆起した異形の2人。

「（何だ？人間なのか、こいつら……？）」

目の前の異形に、流石に疑問を感じるシオン。

だが、考える暇など無い。

異形達はシオンを見るなり走り出した。

来る。

相手は得体の知れない2人だ。

まずは相手の力量を把握すべきだろう。

拳を振るう異形達。

シオンは避けもせず——2人の拳を難なく“受け止めた”。

足元がやや地面にめり込んだ。

だが、その表情には一切の焦りや苦痛は見られない。

「お前達、何者だ？ここで何をしていた？」

一応、声を掛ける。

話が通じる相手ならば、色々と質問しようと考えたのだ。

が、そんな考えは直ぐに吹っ飛んだ。

「G
A
A
A
A
A
A
A
A
! !
」

奇声を上げながら、拳を捻りこんで来る異形達。

重量感が増していく。

無駄な行為だったか——と、心の中で毒づく。

こいつらには知性の欠片も見られない。

話し合いなど必要ない。

速攻で片付けるのみ。

「おおおおおおおおおっ!!」

気合の籠った声を上げ、シオンの両手に意力が集約される。

異形達の拳から軋む音が鳴る。

そして――。

「ふんっ!!」

異形達が、思い切り上空に投げ飛ばされた。

途轍もない重量を誇るであろう巨体が、凄まじい速度で上昇していく。

常人から見れば信じられない光景であろう。

ただでさえ、地面に大穴を空ける様な異形達の拳を受け止め、尚且つそのまま投げ飛ばしたのだから。

投げ飛ばされた異形達は一向に落下する傾向が見られない。

どれだけの高さまで飛ぶのだろうか。

「「A A A A A A ! ! ! !」」

思いがけぬ事態に、奇声を上げる異形達。

だが、事態はそれだけでは収まらない。

自分達の“上空”に、シオンが突如出現したのだ。

投げ飛ばした時点でもまだ地上に居た筈なのに、だ。

「落ちろ」

異形達の顔面に、蹴りが叩き込まれる。

シオンが蹴りを入れたまま、落下が始まった。

上昇する時以上の速度で地上まで一気に加速——そして、激突。

爆音の様な轟音と共に、地面が抉れた。

砂煙が舞う。

周囲はまるで爆撃された跡の様だ。

やがて、砂煙が晴れた。

そこには、動かなくなった異形が2体。

服に付着した砂利を払うシオンの姿があった。

「……さて、どうしたものか」

少々、やり過ぎてしまった。

これだけの事をしでかしたのだから、人が集まるのも時間の問題だろう。

まして、自分は記憶喪失。

なのにこんな化け物を倒すのだから、色々と面倒な事になりそうだな。アンリやフィリップに迷惑を掛けるのは頂けない。

「逃げるか」

それしかない。

この場から立ち去ろうと、走り——出さなかった。

目を鋭くさせ、遙か後方にある倉庫の方を睨んだ。

こんな真夜中だ、何も見える筈は無いのだが……。

「……警戒している様だが、敵意は無いな。なら、行かせて貰おう」

誰に向けて言った台詞なのか。

背を向け、一気に走り去った。

残ったのは動かなくなった異形のみ。

「ふう……行っただか。気付かれてたよね、完璧」

暗闇の向こうから、1人の男が現れる。

左手には黒い剣が握られている。

最初にこの異形達と戦っていた男だ。

どうやら無事だった様子だが……。

「トンデモないねえ。僕だったらこいつらの拳を受け止めるなんてデンジヤラスな真似は出来ないっての」

男はそう言いながら、異形達の前までやって来た。

まだ息はある。

それを確認すると、剣を1体の喉元に向けた。

一気に下ろす。

血飛沫が舞った。

溢れる鮮血で、地面が血の海に変わる。

異形は痙攣し、それに呼応する様に隆起した筋肉が萎んでいく。

やがて、そこには異形の姿は無く1人の男の死体だけが残った。

もう1体に目を向ける。

こちらには剣を向けない。

男は懷から通信機らしきものを取り出す。

「こちら『黒雷』。直ぐに来て欲しいんだけど。うん、“回収”にね」

翌朝。

食堂ではいつもの様に、フィリップが仕込みに励む姿がある。

カウンターにはシオンが居た。

食堂の片隅にあるテレビを眺めていた。

番組はニュース。

気になったのだ、真夜中の出来事が取り上げられたのかを。

『えー、今日未明西区倉庫街で爆発事故が起きた模様』

ニュースから聞こえてきた内容に耳を疑う。

爆発事故……？

次々と流れてくる内容。

一向にあの異形に関する情報は流れてこない。

どういう事だろうか。

何者かが、裏で情報操作しているのか？

しかし、誰が？

メディアを動かすなど、余程の大物でもなければ無理だろう。

「（どっちにしろ、記憶喪失の俺では関わる事すら出来んだろうな……）」

溜息を吐き、カウンターから経つ。

「おや、何処に行くんですか？」

「少し、散歩してくる。ひよっとしたら俺の知り合いと遭遇するかもしれない」

「そうですか。お昼までには帰ってきて下さいよ」

「ああ、分かってる——ん？」

ふと、窓の外に見慣れた姿があった。

オレンジ頭と黒ポニーのコンビ——ジェイとリナだ。

こんな朝早くから何をしているのだろうか？

「アン早く起きないかな〜♪」

「……そうっスね」

「この間みたいな寝巻き姿でさあ」

「……そうっスね」

「グェ〜ヘッヘッヘッ、それだけでご飯3杯いけるわあ〜」

「リナちゃん、その笑い声はどうかと思うっスよ……」

とても女の子笑い声とは思えない声を出すリナ。

ハンカチを目元に当ててるジェイ。

2人が窓の外から店の様子を窺っていた。

やはり目的はアンリの黒ポニー。

オレンジ頭は随伴といったところか。

店の外に出て、2人の元に行く。

「何をしとるんだ、お前らは？」

「あ、赤いの！」

「どもっス、赤髪の旦那」

「名前で呼んで欲しいもんだが……。で、何をしてたんだ？」

「見て分かんないの？アンの可憐な姿を見てたのよ」

「オレは無理やり連れて来られたっス」

「ああ、そうか」

この黒ポニーの頭の中はアンの事でいっぱいらしい。

右手に百合の花持ってるし（笑）。

付き合わされるオレンジ頭もいい迷惑だろうに。

「あ、そーそー赤いの」

「何だ？」

「アンタ、仕事してんの？」

「店の掃除」

「「んなモン仕事とは言わんわぁ！手伝いレベルッ！！」」

ですよねー（笑）。

グウの音も出ないシオンさん。

世話になってる以上、生活費は出さなきゃね。

「しかし、仕事と言ってもな。俺に合う仕事なんて……」

「実は旦那に合いそうな仕事があるんスよ」

「俺に合う仕事？」

「とりあえず付いて来て。まあ、するかしないかはアンタに任せるから」

2人に連れられ、歩くシオン。

彼に合う仕事とは――？

第5話 夜の出来事 (後書き)

戦闘描写が表現し難い……。

やっぱり、戦闘系の話を書いてる人には全然敵わないと思います。

次回はもう少し掛かります。

第6話 セイバー

アークシティ南区。

街の治安維持組織の本拠地である。

シオンはリナとジェイに連れられ、ここに足を運んでいた。

自分に合う仕事をやらないかと言われて来たのだが……。

「着いたわよ」

目の前には何やらデカイ建物。

敷地面積はかなりある。

気になって、周囲に目を配る。

金網が張ってある一帯が目に移り、その先にはリング——闘技場の様な場所が見えた。

「ここは？」

「セイバーギルド・アークシティ本部っスよ」

「セイバーって何だ？」

「第1話にちょっとした説明があるから見て」

「そうか、第1話に書いてあるのか」

「(第1話って何スカ……?)」

メタ発言する2人。

ついていけないオレンジ頭。

そんなオレンジ頭を無視し、中に入る2人。↑ひでえ

慌てて追いかけるオレンジ頭。

入った先はそこそこ広い部屋。

正面に受付があり、受付嬢らしき女性の姿が見える。

スーツとメガネが似合う知的そうな女性。

年齢はシオンと変わらないくらいか。

「あら、リナちゃんとジェイクン。依頼受けに来たの?」

「こんにちは、ランさん。実はセイバーに入りたい人連れて来たんだけど」

「そちらの方?初めまして、受付のランです」

「シオン・ディアスだ。よろしく頼む」

軽く挨拶を交わす2人。

彼女に案内され、ある一室の前に来る。

どうやらここの代表が仕事している部屋らしい。

はたして、どんな人物がここのトップなのだろうか。

ランが扉をノックする。

「ルカさん、失礼します」

「おう、入ってきな」

扉が開き、中に入——れなかった。

扉を開けた途端、紙の山が押し寄せてきたのだ。

咄嗟にランの前に出て、紙の氾濫を食い止めた。

しかし、途轍もない量だ。

何百枚どころの騒ぎではない。

一枚、手に取って見てみる。

何やら、報告書の類らしい。

ランはシオンに頭を下げ、部屋に入る。

「ルカさん！報告書を溜めないでと前にも言ったでしょう！？」

「いやー悪い悪い。まさか、こんなに溜まるとは思わなかったからさあ」

ルカと呼ばれた人物はガハハと笑いながら、頭を掻く。

あまり反省している様には見えない。

名前から察していたが、女性だった様だ。

年齢は30代くらいだろうか。

シオンには及ばないが、かなりの長身だ。

「おーい、これはどうすればいいんだ？」

「ん？誰だい、あんたは？」

「セイバーになりに来た者なんだが……」

「ああ、あんたがジェイ達の言ってた奴か。あたしはルカ・バルド
ー。ここのボスさ」

「シオン・ディアスだ、よろしく頼む……で、これはどうすればいいんだ？」

シオンは押し止めている報告書の処遇を尋ねる。

このままでは身動き出来ないからだ。

「ああ、ゴミ箱に」

「ルカさん？」

「……この部屋の床に頼むよ」

「ああ、分かった」

ランのどす黒いオーラに当てられ、冷や汗を流すルカ。

シオンは学習した。

彼女——ランは怒らせてはならない人間だと。

30分後。

シオンはルカ、ランにある場所まで案内される。

場所は外。

先ほど見えた金網地帯——つまり、闘技場リングらしき場所に立っているのだ。

近くで見ると、リングにはところどころ罅割れが見られる。

それに随分と古めかしい雰囲気を感じた。

ここ数年の内に作られた物ではない。

「大昔の物を再利用してるといったところか……」

「おや、なかなか目が利くねえ。そうさ、このリングは国家が存在した頃に使用されてた物さ。最低でも100年以上は前のモンかねえ」

「なるほど……。で、何をすればいいんだ？まあ、場所が場所だけにさしずめ実技試験といったところか」

「察しがいいねえ。本来ならまず意力の基礎技術を叩き込んで行くもんだけど、あんたはどうやらないみたいだからね。この2人と戦って貰うよ」

この2人——それはシオンをここに連れてきた張本人達。

「ういーっす」

「腕が鳴るわね」

「やはりお前らか」

対戦相手はジェイとリナ。

2人はそれぞれ得物を持っていた。

ジェイは身の丈ほどある大きな剣。

リナはダガーによる二刀流。

得物から2人の戦闘スタイルを分析する。

ジェイの大剣は見る限り、相当な重量があるだろう。

いつも黒ポニーに殴られる印象から想像も出来ないが、見た目によらず臂力があるパワーファイターの様だ。

一方のリナの方はスピードタイプといったところか。

装備が軽いダガー、身に着けている服も動きやすそうな軽装だ。

「こっちは準備万端よ。あんたも何か武器を」

「いらん。俺は素手でいい」

「そーいや、こないだのテロリスト共も素手で倒してたっスね」

「(ほう……)」

シオンの戦闘スタイルに関心を持つルカ。

現代に於いて、素手で犯罪者と戦う者は皆無に等しい。

100年前の大戦時代には、意力を用いた体術が多数存在していたという。

しかし、大戦の教訓で意力の習得に関する法案が決定した事から、古流の体術は次第に廃れていった。

今残っているのは護身術の系統くらいなものだろうか。

ゆえに興味がある。

喧嘩流か、はたまた護身系統の体術使いなのか。

武器を構える2人。

応える様に、拳を構えるシオン。

ずん、と空気が重くなった。

ルカに変化は見られないが、ラン、ジェイ、リナの3人は頬に汗が伝っていた。

空気を重くしたのは目の前の赤髪の男だ。

「どうした？来ないのか？」

「うっさい。行くわよ、ジェイ！」

「うっす！」

2人は左右に別れる。

シオンは出方を待つ。

自ら仕掛ける事も考えたが、まずは相手の実力を見極めた上で行動を取る事にした。

最初に仕掛けて来たのはジェイだ。

重量感ある大剣を構えて突撃してきた。

見た目によらず、足は速い。

自慢の大剣からは意力が発せられ、シオン目掛けて渾身の一撃が繰り出される。

「でえりやあああああああ！！」

迫る大剣。

普通なら避けるだろう。

だが、シオンは避けない。

否、避けるどころか右手をかざした。

けたたましい音が響く。

「なっ！？」

ジェイは驚愕する。

赤髪が掌で自分の大剣を受け止めたのだ。

何故斬れないのか。

理由は簡単だ。

シオンの掌にも意力が込められ、ジェイの大剣の一撃を防いだのだ。

「意力の一点集中——早い。いえ、早過ぎる！」

観戦していたランが声を荒げる。

意力の一点集中。

それは意力の基礎の1つ。

肉体の一部に意力を集約させ、その部分を強化する。

強化する部分は込める意力の強さによって異なり、込める量が多いほど強度は増す。

しかし、込める意力が多いほど時間が掛かるのだ。

赤髪はそれを大剣が直撃する“瞬間”にやってのけたのだ。

早いどころではない、異常とも取れるレベルだ。

込めた意力が少なければ、当然手は切断される。

切断されないという事は、ジェイの大剣に込めた意力よりもシオンが掌に込めた意力の方が強いという事だ。

——押し切れない。

大剣に更に力を込めるも、赤髪は微動だにしない。

だが、膠着状態は何時までも続かない。

「背中がガラ空きよ！」

後方からリナが斬り掛かって来た。

得物は10cmほどのダガー。

ジェイの大剣に比べると一撃の威力とリーチは劣る。

その分、軽くて攻撃速度は速い。

しかし、それ以上に脅威なのは——彼女から発せられる殺気だ。

尋常ではない。

試験ではなく、本^{マジ}気で命を取りに来たハンターとでも評すればいいだろうか。

「（リナちゃああああん、殺すのは不味いっスよオオオオオオオ！
！）」

「（くくけー！そんなの知ったこっちゃないわアアア！アンの貞操を守る為よ！）」

「（いや、どっちかというとりナちゃんが狙ってるっスよね！？）」

目で会話する2人。

オレンジ頭の説得は通じなかった様だ。

どうやら黒ポニーは、今だにシオンがアンダーソン食堂に居候している事が気に入らないらしい。

シオン、危うし！

——とはならなかった。

シオンが大剣を防ぎつつ、後方に蹴りを繰り出した。

慌てて防御するリナ。

ダガーを十字にクロスさせ、盾代わりにしたが凄まじい衝撃で後方へ8メートル近く吹っ飛ばされた。

何とか受身を取り、体勢を立て直すも——両手からダガーを落としてその場で蹲った。

「リナちゃん！？」

「余所見してんじゃねーわよ！あたしよりも自分を心配しろっての！」

幼馴染の異変に、気が動転するオレンジ頭。

彼女は何時もの様な強気な態度を見せ、目の前の相手に集中させる。

「（何つー蹴りよ。手が痺れて動かない……）」

先ほどのシオンの蹴りは強烈で、リナの両手は痺れしまった。

その所為でダガーを落としたのだ。

今の彼女は武器を握る事すらままならない。

ジェイの方も状況は芳しくない。

このままではあっさり負けてしまう。

けど、それでは面白くない。

仮にも自分達の方が先輩にあたるのだ。

このまま黙って……。

「負けられないのよオ！」

地を蹴って、天高く跳躍した。

到達したのはシオンの頭上。

真下にはあの憎らしい赤髪がいる。

彼女の選択肢は1つ。

ありったけの意力を両足に込めて――。

「踏み倒すっ！」

おそらく多くの人が口を並べて、こう言うだろう。

空から爆弾が降ってきたと。

まさにその通り。

リナという爆弾が急降下してくる。

赤髪は目の前のオレンジ頭の大剣を防いでおり、動けない状態。

確実に直撃する―――筈だった。

リナの蹴りが正にシオンの頭に届くかという瞬間、高音が響く。

シオンが左手を頭上に上げている。

掌の先には、1メートル程の光の壁が出現していた。

それは意力で構成された障壁。

一点集中同様、強度の高い壁を作るには相応の時間を要する。

赤髪はこれも一瞬でやってのけたのだ。

——驚愕。

ジェイもリナもランも。

目の前の赤髪の並外れた能力に、ただ驚愕するしかなかった。

「——それまで」

ルカが試合終了を宣言した。

シオンは意力と障壁を消し、ジェイも大剣を退けた。

リナは障壁が消えてバランスを崩しかけるも何とか着地する。

「いいのか？まだ、10分も試合していないぞ」

「必要ないさ。——お前さん、全く本気じゃないだろ」

「試合だからな」

「そりゃそうか。最初から本気だったら、こいつら瞬殺されるだろうし」

その言葉に背筋が凍りつく2人。

実は目の前の赤髪が手加減していたというのは薄々気付いていた。

この男の本気とはどれ程のものだろうか。

想像するだけで恐ろしくなってくる。

「で、結果はどうなんだ？」

「文句無し——合格だよ」

この日、アークシティの新しいセイバーが誕生した。

ルカはほくそ笑んでいた。

途轍もない逸材が来た事に。

——場所は変わり、同じ南区“警備隊本部”。

警備隊。

それはセイバーと並ぶ治安維持組織。

主な仕事は街の巡回、犯罪者の捕縛とセイバーとほぼ同じ。

違う点は基本的に単独、あるいは少人数で行動するセイバーとは異

なり、大人数で行動する部隊に分かれているという点。

犯罪組織との衝突を前提として立ち向かう精鋭隊。

最新鋭のバイクを駆使して活動する高速機動隊。

他にも色々あるが、その中に新たな部隊が加わる事になった。

その名も……。

「“特殊機動隊”……。ここで合ってるのか？」

1人の男が頭を掻きながら、目の前のプレートとにらめっこする。

年齢は20歳前後くらい。

短めに切った茶髪にラフな格好。

右手に荷物袋を提げている。

どっからどう見てもこの場所には不釣り合いな人間だが……。

「まあ、入ってみりゃ分かるか」

あまり悩まないタイプの様だ。

男はノックもせずに扉を開いた。

第6話 セイバー（後書き）

次回はシオンさんはお休みです（笑）。
新キャラが登場予定です。

第7話 新部隊、始動

街の治安維持組織——警備隊。

少数での行動を主体とするセイバーとは異なり、大所帯の部隊での行動が多いのが特徴。

しかし、それゆえに足並みを揃えてからの行動が目立ち、後手に回る事が多々見られる。

前々からその欠点を痛感していた警備隊上層部は、試験的な意味合いを兼ねて新部隊を設立する。

その名は特殊機動隊。

フットワークを軽くする為に、その人数は隊長を含めて6人という少人数で構成される。

そして、今。

6人目である最後の隊員がここに足を踏み入れた。

「ちわー。今度配属されたアスター・ラインバツツですけど」

荷物袋を背負った男が特殊機動隊の部署に入ってきた。

年齢は20歳そこそこ。

短めに切った茶髪にラフな格好は、とても警備隊の隊員とは思えない。

男——アスターを出迎えたのは……。

「ようこそ、特殊機動隊へ！」

「よ、ようこそ、特殊機動隊へ……」

警備隊の制服を纏うロリっ子2人であった。

年齢は11〜12歳くらいか。

元気そうな方はツインテール。

大人しそうな方はストレートロング。

髪の色、顔立ちから何からに何まで瓜二つ。

間違いなく双子だろう。

ここは何だ？

コスプレの会場だったのか？

「悪い、来る場所間違えたみてえだ」

男——アスターは踵を返して外に出ようとする。

が、それを阻止する者が。

何時の間にやら入り口に大柄の男が立ちはだかっていた。

「ようこそ、特殊機動隊へ」

「いや、来る場所間違えたから帰るんですけど」

「安心しろ、間違っとらん」

そう言って、大男はアスターを部屋の中に押し戻す。

とんでもない馬鹿力だ。

抗えずに中に戻されたアスター。

先ほどのロリ達と目が合う。

2人とも涙目だ。

これは自分の所為なのか？

ちよつと心が痛む。

そこに……。

「これでようやく全員が揃ったね。歓迎するよ、アスター・ラインバツくん」

奥の方から細身の青年が姿を現す。

草原を思わせる様な緑の髪を持つ、穏やかな雰囲気を持ち主。

自分とは別の意味でここには不釣合いだ。

「えーと、ここ特殊機動隊で合ってますかね？」

「ああ、間違いなくね。私はアイザック・シュトレイン、よろしく頼むよ」

「どうも。にしても……メンバー若過ぎやしませんかね？」

「確かにね」

ここに居るのは5人。

アスター、大男、ロリ2人、そしてアイザック。

大男は20代後半くらい。

ロリ2人は……まあ、10代くらいか。

アイザックは20代半ば。

アスターは今年20歳になったばかりである。

メンバー全員がこうも若いと、隊長が気になる。

話によると、メンバーは6人。

となると、まだ出ていない最後の1人が隊長に違いない。

こんな若手ばかりのメンツだ。

きつと経験豊富なベテランだと思うが……。

「アイザックさん、隊長ってどんな人ですか？」

「君のよく知っている人だよ」

「へ？」

自分のよく知る人物？

暫し、思考するが誰も思い浮かばない。

一体、誰なのか。

その答えが現れる。

特殊機動隊の入り口が開く。

「皆さん、揃ってますね？」

「こ、この声は……」

硬直するアスター。

聞こえてきた声に聞き覚えがあった。

入って来たのは女性。

年齢はアスターと同じ年くらい。

肩に掛かるくらいまで伸ばした桃色の髪。

歩けば大抵の男は振り向くであろう美貌。

一見すると、何処かのモデルに見えなくもない。

しかし、アスターは小刻みに震えていた。

彼女が自分のよく知っている人間だから。

「ま、マママママリイ！なんで、オメーがここに居るんだよ！？」

「あら、アスターさん♪私がここの隊長ですが何か？」

「帰るっ！」

脱兎の如く逃げ出すアスター……が。

隊長——マリイが足払いを掛ける。

床に倒れこむアスター。

そのまま彼の腕を取り、関節を極める。

「はーなーせー！オメーが隊長なら俺は元の部隊に戻る！」

「逃がしませんよ♪満更知らない間柄じゃないんですから♪」

「誤解を招く様な発言をすんじゃねえ！」

――さて、ここで今回の主人公アスターについて語らせて頂こう。

アスター・ラインバッツ。

年齢は20歳になったばかり。

出身はここアークシティ。

父親は警備隊の隊員、母親は医者だった。

“だった”と過去形なのは、もう両親が居ないからである。

アスターが10歳の頃、この間の記念祭の時の様にアークシティでテロ事件が起きた。

セイバーは勿論の事、当然警備隊も大多数が参加。

テロリスト達との激戦が繰り広げられた。

警備隊隊員だったアスターの父も当然その場に居た。

現場を多く経験したベテランだったアスターの父は、的確な指示で部下達を動かし、市民の避難を実行した。

その甲斐もあり、市民の犠牲は最小限に留まった。

だが、市民の誘導を終えて部下達と合流したアスターの父を待っていたのは――遠距離からの狙撃だった。

仕事を一区切りした満足感からの油断があったのかもしれない。

テロリストの凶弾がアスターの父の頭を粉々に吹き飛ばした。

誘導された市民の中には少年だったアスターの姿もあった。

彼は見てしまった。

父を襲った不幸を。

血の惨劇を。

アスターの父は死んだ。

即死だった。

頭部を失い、地に沈んでいく父だったものが幼い彼の瞼に焼き付いた。

父の訃報は医者だった母の心労を激増させた。

テロで傷付いた人々の治療に専念するだけでも精神にきているのに、そこに届いた父の死。

アスターの母は仕事中に倒れてしまった。

それから1年近く病院に入院したが、体調は芳しくなかった。

アスターが11歳の誕生日を迎えた日、母は静かに息を引き取った。

息子を一人残して逝ってしまう事を謝りながら。

仕事が忙しく、あまり両親に構って貰った経験は無かった。

だが、両親が嫌いだったワケじゃない。

2人とも立派だった。

少年だったアスターは決意した。

両親の様な命を守る人間になろうと。

両親を亡くしてから2年過ぎた頃――アスターは警備隊訓練校に入学した。

13歳から16歳までの3年間、そこで実技と座学に励んだ。

そんな彼と同期で入った少女が居た。

名をマリィ・トライアングル。

彼女は非常に優秀で、実技座学共に好成績を修めた。

特に彼女が得意だったのが、護身術系統。

訓練の際、アスターは彼女の餌食となった。

彼女の関節技に何度泣かされた事か。

アスターにとってマリィは最も苦手な相手だった。

幸いだったのは、彼女は飛び級で学校を卒業した事だ。

同期にあつという間に追い抜かれるのは癪だったが、毎日関節地獄に遭うのは嫌だったのでホッとした。

その後、無事卒業して警備隊に入隊。

初めて配属されたのが遠方巡回部隊——アークシティの外を巡回する部隊。

街の外担当の部隊なので、当然潜伏している犯罪者と出くわす事もしばしばだ。

座学はお世辞にも優秀とは言えなかったアスター。

反面、実技は光るものがあり、数名の犯罪者を同時に相手にして捕縛に成功する実力があつた。

正に水を得た魚の様な活躍。

4年近い勤務で、アスターの捕らえた犯罪者は100人を超えた。
順風満帆な日々を送っていたのだが……。

「アスター、本部からの辞令で別部隊へ異動だそうだ」

「え!？」

本部から急な異動要請が来たのだ。

内容は大雑把にまとめると以下の通り。

1. 近日、警備隊内で新部隊を創設する。
2. メンバーは6人。
3. アスター・ラインバツをメンバーに推薦する。

新部隊設立。

その話は少し前から噂になっていた。

まさか自分がそのメンバーに選ばれるとは考えていなかったが……。

今の部隊で行動するのも悪くはないが——何事も経験だ。

こうしてアスターは新たな仕事場へと赴いた。

で、現在に至る。

「くっ……断りやよかったぜ。テメエが隊長なら絶対来なかったのに……」

「あらあら、アスターさんのイ・ケ・ズ♪」

「アダダダダダ！逆に関節を極めるんじゃないやねえ！！」

黒い笑みを浮かべながら、関節を極めるマリィ。

堪らず、床を叩くアスター。

訓練校時代の苦い思い出が蘇ってくる。

「あの、隊長。自分達も……」

「自己紹介しまぁーす」

「じ、自己紹介します……」

苦しむアスターに同情しつつ、話し掛けてくる大男。

ロリコンビは自然体。

見てないでコイツを止めてくれよ、オイ。

心の中でそう思うアスターであった（笑）。

「リックス・サーレン、28歳。先日まで市内巡回部隊所属でありました。よろしくお願いします」

「ミラ・ミレット、12歳です」

「ス、スピカ・ミレット、12歳です…」

「おい、待て。何で、ガキが警備隊に入れるんだよ？警備隊に入れるのは最低でも16からじゃ…」

大男——リックスはともかく、何故にこんな子供が？

最もな疑問だ。

それに答えたのは我らが隊長。

「彼女達は“異能者”なんですよ」

「は？」

「本当なのですか、隊長？よく彼女達を保護出来ましたね……」

その言葉に首を傾げる。

アスターは全く、聞き覚えがない模様。

アイザックの方は驚きの表情だった。

「アイザックさん、“異能者”って？」

「簡単に説明すると、特殊な能力を持った人間の事さ」

アイザックによると、“異能者”というのは――。

1. 古来から確認されている特殊な能力を持った人間。
2. どんな能力を持っているかは人それぞれ。
3. 能力は1つしか持っていない。
4. 戦略的な価値から異能者狩りと呼ばれる非道な行為が行われた過去がある。

と、こんな感じだ。

つまり、この双子は特殊能力の持ち主で、警備隊で保護されている間柄らしい。

「能力ってどんなもんが使えるんだ？」

「知りたいですか？それじゃ、やりますね！」

双子の姉——ミラが目を閉じる。

何か集中してる様だ。

一体何が起きるのか？

と、

『聞こえますか？』

「うを！？頭ん中に声が聞こえてきた！？」

いきなり頭にミラの声が聞こえてきて驚くアスター。

目の前のミラは目を閉じたまま。

口を全く動かしていない。

『これが私の能力『念話』。私の知っている人なら、どんなに遠い場所でも声が頭に届くんですよ』

「便利といえは便利だが、頭に声が響くって何か気持ち悪イな……。そっちの妹の方は？」

「えっと……」

妹——スピカが部署内に置いてあったある物を手に取る。

カッターナイフだ。

何に使うのだろう。

彼女はカッターの刃を少し出し、その刃で自分の指先を少し切った。
血が少し滲み出てくる。

「おい、何を――」

最後まで言葉を出し切れなかった。

彼女の指の傷が、あっという間に塞がったのだ。

自然治癒にしてはあまりに早過ぎる。

「これは……」

「『治癒』の能力です……。今のは自分に使いましたけど、他の人の傷も治せます……」

「なるほど、これが異能者って奴の力か」

この2人が保護されている理由が理解出来た。

犯罪組織なんぞに捕まれば言い様に利用されるのは目に見えている。

最悪の場合は実験動物扱いだ。

「OK、理解したぜ。ところで、確認してえんだが……やっぱ、辞退とか出来ねえのか？」

「まだそんな事言ってるんですか♪少しキツ目に技を掛けた方がいいですねえ」

ボキボキと指を鳴らすマリィ。

己の発言にやや後悔するアスター。

合掌する残る面々。

その日、1人の警備隊員の悲鳴がとある部署から延々と聞こえたという（笑）。

第7話 新部隊、始動（後書き）

久々に投稿。

やはり主人公系は三枚目が一番です。
書きやすいから（笑）。

第8話 記憶を取り戻せ！

——俺の名はシオン・ディアス。

現在、アークシティのセイバーギルドに所属する新米セイバーである。

作者が書くのが遅い所為でまだ肝心の仕事の場面が描かれてはいないのだが……。

それは置いといて、俺は今——凄まじく危険な状態にある。

どんな状態かというと……。

「シオンさん、これで記憶が戻りますよ！」

「ホラ、早く飲んで」

目の前に居るのは、居候先であるアンダーソン食堂の看板娘、アンリ・アンダーソン。

俺がツツコミ系妹キャラの資質を見出した素晴らしい逸材だ。

もう1人はリナ・アイランス。

アンリの友人であり、俺をセイバーに誘った少女。

2人は怪しいどす黒い液体を飲めと、俺に迫っている。

視線を液体に向ける。

黒い。

とにかく黒い。

黒インクにしか見えない。

しかも、ぐつぐつと煮立っており、発せられる凄まじい悪臭が鼻腔を麻痺させる。

——これを飲めと？

命の危険を感じた。

逃げたい。

逃げたいのだが——。

「シオンくん、男を見せる時だよ♪」

「旦那、ファイトっスよ！」

後方には雑貨屋ことザッシュ・シャルフィド。

オレンジ頭こと、ジェイ・レアリストが布陣していた。

おかしい。

何故、こんな展開になった？

時刻は少し遡る。

この展開になった発端まで――。

アークシティ西区、病院。

シオンは病院の医師と対面していた。

「先生、俺の記憶なんだが……何とか取り戻す事は出来ないか？」

「うーん、君の記憶喪失は相当重症みたいだからねえ。難しいかもしれない」

シオン・ディアスは記憶喪失である。

記念祭でアンリを助けたあの日より以前の記憶が無い。

どこで生まれたのか？

家族は健在なのか？

何も思い出せない。

そして、もう一方で気になっていた。

記憶は無いのに、肉体が憶えている体術と意力の扱い方。

素人から見ても、シオンの戦闘能力の高さは尋常ではない。

明らかに実戦慣れしていると実感出来る。

一体、自分は何者なのだろうか。

「大体は自然回復を待つのが一番だと思うよ」

「そうか……」

大抵の答えが自然回復。

時間に任せるしかない。

医師にそう言われたんじゃ、仕方無い。

病院を後にするシオンさんであった。

西区、雑貨屋シャルフィド。

暮らしに役立つ日用品から、珍しい調味料、怪しい品まで扱う知る人ぞ知る隠れた名店。

この店は店主が気ままな時間帯で営業しており、開店と閉店の時間が一定していない事で有名である。

「ふぁゝぁ……まだ寝足りないや」

大きな欠伸をしながら、この店の店主——ザッシュ・シャルイフイドが寝室から出てくる。

寝癖でボサボサになった髪を掻きながら、洗面所に向かう。

ふと、何やら居間の方から音が聞こえてくる。

どうやらテレビから流れてくる音楽や声の様だ。

「あれ？テレビ切るの忘れたかな？」

訝しがりながら、居間の扉を開く。

ちゃぶ台の上に湯気の立った湯飲みが置かれていた。

いい香りだ、新茶に違いない。

テレビにはどこか遠くの風景が映っている。

「おお、起きたか。邪魔してるぞ」

ちやぶ台の周りに敷かれた座布団。

その1つに座る男が1人。

病院帰りの赤髪——シオン・ディアスであった。

湯飲みを手に取り、ずずつと啜る。

「うむ、いい味だ」

「あ、いいでしょ？ やっぱ新茶は美味しいよね？」

「同感だ。それはそうとまず顔を洗ってくるといい。後、歯磨きもな」

「はい……って違うでしょうがアアアアアアアアアアア！」

ザッシュの攻撃！

スキル“ちやぶ台返し”発動！

ちやぶ台がシオンに襲い掛かる！

しかし、シオンは躲した！

シオンは不敵な笑みを浮かべている。

「なかなかのツツコミだ。やるな、雑貨屋」

「褒められても嬉しくないわ！何勝手に人ん家のもの扱ってんの！
？どっから入って来たのオオオオオオ！？」

すっと指差す赤髪。

その先に視線を向ける雑貨屋。

視線の先には破壊された裏口の扉が転がっていた。

「イヤホンを押しても出らんから、裏口から入らせて貰った」

「器物破損の上に不法侵入！？」

破壊された裏口の扉の前で頭を抱える雑貨屋。

赤髪は、そんな事も気にせず立ち上がる。

少し歩き、近くのタンスの中からせんべいを取り出す。

パリッという音が聞こえ、せんべいは赤髪の胃の中に入っていく。

「美味しいな、コレ。今度来た時も食おう」

「何でせんべい置いてる場所知ってんのオオオオオオオ！？」

小一時間後。

座布団に座る赤髪と雑貨屋。

雑貨屋が急須で赤髪の湯のみにお茶を注ぐ。

そして、次に自分の湯飲みにも注いだ。

互いに茶を啜る。

「はあ……疲れた。で、何の用？」

「実は、俺の記憶についてなんだが」

「記憶？ あーそういえば、フィリップさんから君が記憶喪失って聞いてたっけ。それで？」

「病院で医者には自然回復に任せるのが一番と言われたが、やはり気になってな。そこで店長に相談したら……」

病院から雑貨屋の所に行く前——アンダーソン食堂。

店長ことフィリップ・アンダーソンがカウンター席にお茶を出す。

カウンターに居るのは居候ことシオン・ディアス。

「記憶の回復ですか？」

「ああ、少しでいいから思い出したいんだ。何かいい方法は無いかな？」

「そうですねえ、こういう時はザッシュくんのお店に行ってはどうかでしょう？」

「雑貨屋の店に？ 奴が何かいい方法を知ってるのか？」

「彼の店には色んな物がありますからねえ。まあ、行って損は無いですよ」

「というワケでここに来た」

「どーいうワケだよ……。しかし、記憶の回復かぁ……。方法が無くもないけど」

げんなりしながら、ザッシュはタンスまで行ってゴソゴソと何かを探している。

やがて、タンスの中からあるモノが取り出された。

どす黒い液体が入った瓶。

赤髪の頬に、汗が伝った。

何だ、これは――？

見るからに怪しいシロモノ。

いやいや、これインクか何かではないだろうか。

とりあえず聞いてみる。

「雑貨屋、俺はツツコミを入れられるのが大好きだ。ライフワークと言ってもいいくらいだ」

「いきなり何言ってるの君は？」

「だが、今回はあえてツツコミに回らせてもらう。そのあからさまに黒インクにしか見えん液体は何だアアアアアア！？」

「記憶が戻るかもしれない液体」

「“かもしれない”とは憶測か……。飲んでも記憶が戻る保証は無いんだな？」

「さあね？ 実は誰にも試した事が無いんだよ。君が最初の挑戦者」
いけにえ

「帰る」

立ち上がり、店を後にしようとする赤髪。

しかし、後方からガシツと肩を掴まれた。

掴んだのは言わずもがな雑貨屋。

いい笑顔だ。

目は全く笑っていないが。

おそらく、裏口を壊された事を根に持っているのだろう。

「シオンくん、裏口の弁償はいいからコレ飲んでよ。そしたらチャラにしてあげるからさ」

「絶対に断る。必ず弁償するから勘弁してくれ」

記憶を取り戻したい。

だが、命も惜しい。

そこに――。

「おっ邪魔」

「こんにちは」

「ういっす！」

突如訪れる来訪者。

黒ポニーことリナ・アイランス。

居候先のアンリ・アンダーソン。

ついでにオレンジ頭ことジェイ・レアリスト。

顔見知りの3人だった。

「オレだけついで扱い!？」

「何言ってるのよアンタ？」

「えーと、調味料買いに来ただけど……。シオンさん、どうしてここに？」

「おや、いらっしゃい。実はシオンさんの記憶を取り戻す方法を教えていてね」

「だから、いらんと言っている。俺は帰る」

「記憶を取り戻す? なら、手っ取り早い方法があるじゃない」

黒ポニーに何か提案があるらしい。

やたらと自分を敵視する傾向があるので、助け舟など出さない――
―そう思っていた赤髪。

だが、今は感謝する。

雑貨屋の勧めるあのワケの分からん液体を飲むよりはマシな方法に
違いない。

……と、思ったのだが。

彼女はある物を握り、構える。

――それは金属で出来た棒。

よく野球とかで使う棒。

俗に言う金属バットだった。

でも、普通の金属バットじゃない。

やたら釘とかが刺さっている。

しかもよく見ると何か赤いモノが付着している。

「……オイ、ちょっと待て。何のつもりだ？ 記憶を取り戻す方法じ
やないのか？」

「え？ だからコレがその方法。コレで頭ぶっ叩くのよ。いわゆるシ
ョック療法ってヤツ」

「それに付着しとる赤いモノは何だ？」

「ジェイの血。前に着替えを覗こうとしたからこれでフルボッコにしたのよ」

オレンジ頭に視線を向けるシオンさん。

けど、オレンジ頭は遠い方を見ていた。

何か小刻みに震えている。

ああ、なるほど。

アレで殴られた時の事を思い出してるのか。

どうやら彼のトラウマらしい。

「そんじゃいくわよ」

ぶんぶんとバットを振り回す黒ポニー。

流石に後ずさる赤髪。

あんなんで記憶が戻るワケがない。

それ以前に三途の川を渡るかもしれない。

「いや、待て。いくらなんでもそんな方法で戻るワケ……」

「死ねエエエエエエエエエエ！」

「おい、待て！殺す気かアアア！？」

「記憶なんぞなんぼのもんじゃーい！アンタの抹殺が目的よオオオオオオオ！」

「ぬうううううう！死んで堪るかアアアアアアア！！」

やはり、自分の抹殺が目的だった黒ポニー。

赤髪は身に迫った危険に対し、いつも以上に感覚を研ぎ澄ます。

研ぎ澄まされた感覚は、敏感に危険を察知。

赤髪の反応速度を飛躍的に高めた。

渾身の振り下ろし。

難なく躲す。

居間のちゃぶ台が粉碎される。

「どわあああああ！ちゃぶ台がアアアアアアア！！」

プロも真っ青なスイング。

赤髪は右に避ける。

テレビが木っ端微塵に。

「テレビまでええええええ！」

バットにありつたけの力を込めて放つ突き。

跳躍して回避。

後方にあつたタンスが全壊。

ダンスの中身が周囲にブチ撒ける。

18歳未満の良い子は見てはいけない本が沢山。

「イヤアアアアア、僕の秘蔵本が~~~~!!」

「あ、兄貴！ソレ見せて欲しいっす！！」

「ジェイクくん、こんな時に……」

「君ら、あの2人止めてよ!？」

秘蔵本の閲覧をせがむオレンジ頭。

呆れるアンリ。

2人の仲裁を頼む雑貨屋。

破壊される雑貨店で、不毛な争いが勃発してから約30分後――。

アンリの説得で、僅か0.01秒という速度で破壊活動を停止した黒ポニー（笑）。

荒れた居間を少し片付け、新しいちゃぶ台が設置された。

そこに置かれる湯飲み。

「というワケで、当初の予定通りコレを飲んで貰うよ」

湯飲みの中にはあの黒い液体。

ゴポゴポと、嫌な音を立てている。

しかも途轍もない悪臭が漂う。

「おい、本当に大丈夫なのかコレ？」

「だから君が最初のチャレンジャーだって。ちなみに逃げてでも無駄だから。逃げたら、コレをフィリップさんに渡して君の食事の中に入れて貰うだけさ」

「くっ……どうしても俺を殺したいらしいな」

「旦那、大丈夫っスよ！鼻摘んで飲めば少しはマシになるっス！！」

「根本的な解決になっとらんわアアアア！」

以上によって、現在の危機的状況にあるのだ。

記憶を取り戻すのに、どうしてこんな目に遭わなければならんだ……。

心の底からそう思う赤髪。

しかし、逃げても食事に混ぜられる可能性がある。

ならば、やる事は1つ。

飲む、死を覚悟して。

湯のみに口を付け、一気に呷る。

——瞬間。

赤髪の頭の中に未知の世界が広がった。

大きな翼を広げて、大空を飛ぶ巨大生物。

腰蓑を付けて、片手に槍を持って逃げる動物を追う原住民らしき人々。

数百メートルはあろう巨体で、街を破壊する巨大ロボ。

そこは正にカオスワールド。

この世のものとは思えない光景が広がっていた。

——まあ、要するに幻覚を見ているワケですが。

そのままぶっ倒れる赤髪。

「あゝやっぱダメだったかあ」

「こんなモン飲んだらそりゃ倒れるっスよ……」

「お約束過ぎね」

「と、とりあえず毛布か何か掛けてあげよ!」

それよりも医者を呼べ、アンリよ（笑）。

「（……ん？）」

シオンが瞼を開く。

そこは雑貨店ではない。

血の匂いが漂う場所。

周囲には何十という数の人間の成れの果て——死体が転がっていた。

地獄。

そうとしか言いようの無い光景。

何故、自分はこんな場所に居るのだ？

「(何だ、ここは……？ アンリ達は何処に……)」

「ぎゃあああああああああ！」

「(――悲鳴!?)」

遠くから聞こえて来る悲鳴に反応し、駆け出す。

行けども行けども死屍累々。

常人なら、小一時間も持たずに嘔吐するだろう。

走り抜いて、辿り着いた場所。

そこでは惨劇が繰り広げられていた。

1人の男が逃げ惑う者を容赦なく殺戮している。

その男――見るからに常人とは思えない風貌の持ち主だった。

見た目は20代前半くらいか。

真白い、まるで雪の様に白い髪。

そして――その男を危険だと思わせる最大の要素。

目だ。

男の目は明らかに常人のものとは違った。

どす黒い色をした眼球と、まるで血を連想させる様な真っ赤な瞳。

異形の男を見た瞬間、シオンの身体が硬直した。

恐怖ではない。

「（あの男、あの目——何処かで見た事がある。何処だ、一体何処で——ッ！）」

蹲り、頭を押さえる。

凄まじい頭痛がシオンの頭を襲う。

何かを思い出そうとしているのか。

だが、意識が霞む。

異形の男の姿が見えなくなる。

「（お前は誰なんだ——）」

その疑問の答えを聞く事も出来ず、意識は途切れた。

「ッ！」

大量の汗を流しながら、身を起こす。

周囲には自分を囲う様にアンリ達の姿が。

「お、ようやく起きたね。魔されてたみたいだけど、大丈夫かい？」

「……気分は最悪だ。あんなワケの分からん劇物を口にした所為でな」

「悪い夢でも見てたんですか？」

「夢、か。まあ、悪夢といえば悪夢かもしれんが……」

「ひょっとして過去の夢とか？」

——過去。

そう言われて、少し顔が強張った。

あながち間違いでは無いかもしれない。

夢に出てきた異形の男には何かを思い出させそうな要素があったのだから。

「あの黒い液体。もしかしたら本当に記憶を回復させる効果があったのかもしれないな。……効果は微々たるものだがな」

「え、マジ!? いや、まさか本当に効くとはね」

「微々たるものだ。もう飲まん。自然回復に身を任せた方が安全だ」

「そりゃ残念。まあ、毎回ぶっ倒れられても困るしねえ」

残念そうに両手を挙げる雑貨屋。

苦笑するアンリ達。

そんな彼等を尻目に、シオンは考えていた。

夢の光景。

——あれだけの犠牲者が出た事件があったのか。

あの異形の男は何者なのか。

「（今度、図書館か何かで調べてみるか）」

暗闇の中、2人の男が対面していた。

片方がもう1人に写真を渡す。

「残念だが、この男の素性は分からなかった」

「そうですか……」

「しかし、何者だこの男は？ “ミスト”の情報網にも引っ掛からんとは……」

「もしかしたら……」

「もしかしたら、なんだ？」

「“生きているという事実を抹消させられている” かもしれないね」

「ますますキナ臭いものを感じるな——この男」

写真に写る男。

赤い髪に青い瞳の男。

シオン・ディアスその人だった。

第8話 記憶を取り戻せ! (後書き)

今回はやや早めに書けました。

次回は何時になるやら(汗)。

第9話 初仕事と落ちる少女

海が見える街。

少女はそこで生まれた。

家庭はごくごく平凡。

父が居て、母が居る。

休みの日には、よく両親に海に連れて行ってもらった。

父はよく自分に海の生き物の事を教えてくれた。

母は優しく、寝る前に楽しい話を聞かせてくれた。

少女は幸せだった。

ある日の事だ。

父が船に乗ろうと言った。

何でも父の友人がある客船の招待状を貰ったそうなのだが、都合で行けなくなったという。

代わりに行ってくれないかと譲られ、父の手に渡った。

船に乗った事が無い少女ははしゃいでいた。

初めての船旅。

楽しい思い出が作れる事に。

——それを、彼女は後悔する事になる。

船旅が始まって、初めて訪れた夜。

船内に轟音が響いた。

至るところで火災が発生。

船員も乗客も、突然の事態に混乱するばかりだった。

事故ではない。

轟音と火災の原因は人為的なものだった。

少女が乗り合わせた船。

それにはどこぞの有力者が乗っていた。

船がこんな状況に陥ったのは、その人物を疎む存在によるもの。

つまり、テロリストの仕業だ。

連中は迷彩した小型の飛行船で船に接近。

爆弾を投下して、船が動きを止めた隙に侵入して来た。

子供、大人――老若男女。

関係なく殺された。

証拠隠滅の為の口封じだろう。

当然、少女と両親も狙われた。

両親の決断は早かった。

愛娘を海へと放り出した。

救命具も身に付けていない。

このままでは溺れてしまう。

しかし、船内に居れば確実に殺される。

正に一か八か。

燃える船の光景を睨に焼き付けながら、少女は海に沈んでいった。

冷たくて、暗い。

まるで闇の中へ落ちていく感覚だった。

息が出来ない、寒い、心細い。

少女の苦しみは誰にも聞こえない。

必死に手を伸ばす。

だが、何も掴めない。

こんな場所に自分以外の人間など居る筈が無いのだ。

——助けて。

誰にも聞こえない叫び。

その筈だったのだが——。

手に暖かな感触が伝わった。

深い闇の中から引っ張り出される。

「大丈夫……すけて……」

声が聞こえる。

少女は誰かに助けられた様だ。

重そうに瞼を開く。

ぼんやりとした姿が映る。

助けてくれたのは男——いや、少年といったところか。

年齢は16歳くらい。

鮮やかな青い髪が特徴的だ。

琥珀色の瞳は宝石の様に見える。

少年は少女をしっかりと抱きしめ、懸命に泳ぐ。

その心地良さに身を任せながら、少女は意識を失った。

——アンダーソン食堂、アンリの部屋。

ジリジリと、目覚ましの音が聞こえる。

時刻は午前7時。

「ふにゅ……」

この部屋の主たる少女——アンリがムクリと起き上がる。

目覚ましのスイッチを切ると、大きな欠伸をする。

ベッドから出て、カーテンを開く。

朝日が部屋の中に差し込む。

「いい天気。……懐かしい夢見ちゃったな」

彼女は悲しさと嬉しさが入り混じった様な笑みを浮かべ、机の上に置いてある物を手に取る。

青い石がはめ込まれたペンダント。

それを首に掛け、部屋を出る。

1階に降りると、既にシオンが朝食を摂っていた。

「ん、起きたか。先に食べてるぞ」

「おはよーございます。あれ……叔父さんは？」

「調味料が切れてるらしくてな。雑貨屋に所に行ったが……ん？そのペンダントは？」

シオンの目にアンリの首に掛けられているペンダントが目に入る。

「これですか？昔、大切な人から貰ったんです」

「そうか……」

ペンダントをじっと見つめるシオン。

何か様子がおかしい。

真剣な眼差しだ。

そんなに珍しいのだろうか？

「どうしたんですか？」

「いや、そのペンダント……何処かで見た様な気がするな」

「ほ、本当ですか？何処で！？」

「落ち着け。俺が記憶喪失というのを忘れたか？」

「あう……」

そうだ。

この赤髪は記憶喪失なのだ。

「まあ、気にしても仕方ない。そろそろ時間だから行ってくる」

「え？何処にですか？」

「初仕事に、な」

アークシティ郊外——とある森の中。

柄の悪そうな連中が集まっていた。

携帯用のナイフや銃器。

明らかにそこいらの一般人ではない。

そこから数百メートル離れた木の上から、連中を監視する者が居た。

黒ポニーこと、リナだ。

隣にはオレンジ頭こと、ジェイの姿も。

「あれがこちら辺に現れる窃盗団ね。数は14人てトコかしら」

「余裕っスね」

「アホ、あたしらが相手にすんじゃないのよ。今日は赤髪さんの初仕事だから、見物よ見物」

「旦那なら余裕綽々じゃないスカ。オレらより手際いいかも」

そう、今日はシオンの記念すべきセイバーの初仕事。

ルカからの言い付けで、シオンの実戦を監査しろと言われた。

新人セイバーの初仕事の際には、先輩セイバーが監査する事が義務付けられている。

もし、危険に陥ったら助けに入らなければいけないのだ、

しかし、2人とも別に行かなくてもいいんじゃないかと思った。

だってあの赤髪、自分達より強いし。

この間の実技試験でその強さは嫌というほど理解している。

そうこう考えている内――視界に噂の赤髪が入った。

何時の間に。

足音も、気配も感じなかった。

つくづく思った――やはり、只者ではない。

赤髪は自分達のように木に登らず、窃盗団から死角になる位置に腰を下ろす。

どうやら窃盗団の数と武装を把握している模様。

射抜く様な鋭い目付きに、背筋が寒くなった。

まるで獲物を狩る狩人。

2人にはそう見えた。

窃盗団が動き始める。

同時だった。

赤髪の姿が消えた。

身を屈めて、相手の様子を伺う赤髪——シオン・ディアス。

今日は初仕事。

近辺に出没する窃盗団の捕縛。

相手の武装を確認する。

数は14人。

メンバー全員が腰にナイフを1〜2本。

7人が拳銃を所持。

2人が狙撃銃を抱えている。

それ以外の5人はナイフ以外に、刀剣や斧など……どうやら使い慣れた武器を持っている様だ。

頭の中で、戦略をイメージする。

「行くか」

誰にも聞こえない大きさに呟くと、その場から“消えた”。

否、消えたのではなく走ったのだ。

あまりに速さに、常人から見れば消えた様にしか見えない。

まず狙うは——遠距離班。

後方を歩く狙撃銃を携帯した2人。

その背後に、音も無く出現するシオン。

両手で手刀を放ち、2人をあっという間に気絶させる。

「——!？」

1人が異変に気付いき振り向くも——鳩尾に一撃を喰らい悶絶する。

「何だ!？」

「誰だ、貴様！」

3人が倒れた事で、ようやく異常に気付く残りの面々。

何時の間にやら、赤い髪の男が背後に居る。

シオンはパキポキと指を鳴らす。

「記念すべき初仕事だ——さっさと終わらせるとしようか」

低い声でそう言いながら、両手に意力を纏う。

全身から凄まじい殺気が放たれる。

窃盗団のほぼ全員の膝が笑っていた。

目の前の赤髪の男への恐怖に、本能が叫んでいる。

——殺される、と。

「うわああああああああ」

拳銃を持った1人が、恐怖のあまり発砲する。

砲身からは鉄の塊——即ち、銃弾が発射される。

この時代、窃盗団が使っている銃器は骨董品と言ってもいい。

何故ならば、今の時代の銃器は意力そのものを弾丸へと変換する銃

が大半だからだ。

その破壊力はただの銃弾とは比べ物にならず、発射速度も段違いだ。しかしながら、その手の武器を使用出来るのは治安維持組織や大規模なテロ組織くらいだ。

10人そこそこの窃盗団如きに手が出せるシロモノではない。

骨董品と呼ばれ様と、武器は今これしかないのだ。

殺らなければ殺られる。

この男は恐怖を払拭したいが為に、発砲した。

だが、シオンは迫りくる弾丸を避けようとしないう。

常人から見れば、発砲は一瞬しか見えないだろう。

彼には一瞬ではなく、極めて遅く——スローに見えた。

自分の顔に向かってくる弾丸。

だが、恐怖も何も感じない。

あまりに遅過ぎるのだ。

シオンは右手の人差し指のみに意力を一点集中させる。

そして、飛んでくる弾丸の軌道を指先で“逸らした”。

逸らした弾丸は、そのままシオンの後方の木に直撃。

木の表面に銃痕が出来る。

何が起きた。

理解出来ず、更なる恐怖から発砲しようとする男だが。

「寝てろ」

一瞬で間合いを詰めたシオンの掌底が、男の顎に叩き込まれる。

男は声を上げることも無く気絶した。

突き上げる様に放たれた凄まじい一撃が脳震盪を起こし、意識を奪ったのだ。

見えなかった。

その場に居た面々に、目の前の赤髪の男の動きを捉え切れる者は皆無。

出来る事は1つ。

「散開！」

残る10人は一斉に散る。

シオンの方に向かってこない。

それぞれがバラバラになって、四方八方に走る。

所謂、敵前逃亡。

敵わないと判断したのだ。

「悪いが誰1人として逃がさん」

気絶した4人を一箇所に集める。

目を覚ます気配は無い。

1人の頭に手を当てる。

「この様子なら半日くらいは起きないが……念には念を入れるか」

懷からワイヤーを取り出す。

それで4人の手足を動かない様に結ぶ。

これは拘束用に用意した物だ。

ロープだと切られる可能性もあり得るのでワイヤーを選んだ。

「さて——残り10人」

両足に意力が集中する。

突風が吹く。

過ぎ去った後に、シオンの姿は無かった。

——撤退からおおよそ15分。

窃盗団の1人が走っている。

獲物はナイフと幅の広い長剣。

装備からして、接近戦タイプの様だ。

息を切らしながら、必死で逃げる。

バラバラになって逃げた仲間と落ち合う場所は決めている。

いくらあの赤髪が強くても、その場所までは分かるまい。

そう高を括っていた。

男は警戒心を強く持つべきだった。

彼は気付いていない。

自分に迫ってくる存在を。

突風が森の中を駆け抜けた。

何故、急に？

疑問に感じながら、風で舞い上がった砂煙が視界を遮る。

「止まれ」

いきなり前方から声が聞こえた。

視界が晴れると、そこにはあの赤髪の男が立っていた。

突然の来訪に、身体が後ずさる。

どうやって——頭が混乱するが、これだけは理解出来た。

目の前の赤髪の男は、自分を追いかけて来てこの場に現れたという事だ。

「く、来るな！来たら——」

「来たら何だ？お前で最後だ」

「さい…ん？」

「他の連中は全て拘束した。後はお前だけだ」

全身が凍りつく。

逃げてから20分も過ぎていない。

なのに、他の9人は既に捕らえられている。

この男は何だ？

本当に人間なのか――。

「お、お前……。何なんだよ、お前はアアアア!?」

「俺か? 何といわれても記憶喪失だから己の素性は知らん。言える事は1つ――今日が初仕事の新米セイバーだ」

赤髪が男の背後に一瞬で回り込み、手刀を叩き込む。

そこで男の意識は途切れた。

気絶した男を地面に横たえる。

ワイヤーで手足を拘束完了。

「いやあ、あつという間だったスねえ」

上の方から声が聞こえてくる。

近場の木の上の方に視線を向ける。

そこにはジェイとリナの姿があった。

「全員捕縛した。後は警備隊とやらに引き渡せばいいんだな」

「ういっす。にしても、旦那……。本当に人間っスか?」

「おい、人を化け物呼ばわりするな」

「したくもなるわよ。あたし等でもあんなにバラバラに逃げられた

ら全員捕まえるのに何時間掛かるか……」

愚痴る黒ポニー。

どうやら、赤髪の活躍が面白くない様子。

まあ、立場上からきているものだろう。

年齢は下だが、一応彼等の方が先輩にあたる。

新米の癖に、ああも簡単に事を解決されるのは悔しいに違いない。

「いや、大した事は無——」

「「大した事あるわァ——」」

謙遜しようとした途端、2人のツツコミが入る。

黙る赤髪。

あれ、どうしたんだろうか。

少し震えてる。

言い過ぎたんだろうか。

「え、と……旦那」

「……だ」

「へ？」

「いいツツコミだアアアアアア！」

少年の様に目を輝かす赤髪。

その場でずっこける2人。

赤髪はずんずんとやって来て、2人の手を握る。

「お前等、いいツツコミじゃないか！何故、それを何時もやってくれん！？」

「アンタどれだけツツコミまれるのが好きなんスか！？」

「ご飯10杯いけるくらい好きだアアアアアア！」

「「食い過ぎだろうがアアアアアア……はっ！」」

「ハハハハ、いいぞもつとやれエエエエエ！」

こうして連絡を受けた警備隊が到着するまでこのやり取りが続く。

捕縛した犯罪者は警備隊に引き渡す決まりになっているのだ。

警備隊が着いた頃には、げっそりした2人が居た。

到着した隊員は首を傾げながらも、窃盗団を車の中に連行する。

初仕事は大成功。

意気揚々と帰路に着く赤髪。

やっぱりこいつに監査なんかいらなかった。

心の奥底からそう思う黒ポニーとオレンジ頭であった。

アークシティ中央公園。

公園の隅に立つ一本の木の上。

かなりの高さで、上の方から落ちれば大怪我では済まない。

そんな木を登る1人の少女が居た。

アンリだった。

「うんしょ、うんしょ……」

なかなか器用に登る。

華奢な見た目に反して、運動神経は悪くない様だ。

なかなか速いペースで上へ上へと登っていく。

何故、彼女がこんな事をしているのかというところ……。

「ニャー……」

子猫が木の上の辺りで震えていた。

どうやらこの木に登ったらしいが、降りられなくなった模様。

たまたま公園に来たアンリが鳴き声を聞きつけて駆けつけたのだ。

「待っててね。もうちょっとだから」

そう言って、登るアンリ。

気付けば、かなりの高さに到達していた。

チラッと下を見る。

血の気が引いた。

が、ぶんぶんと頭を振って気持ちを切り替える。

「もうちょっと……」

あと少しで猫に届く。

猫の方も、震えながらもこちらに近付いて来る。

アンの差し出した手に柔らかい感触が伝わった——が。

ミシミシという、嫌な音が聞こえる。

足場に使っていた枝からだ。

——折れる。

そう理解するのに時間は要らなかった。

間を置かずに折れる枝。

猫を抱きかかえたまま、下へと落下する。

「（この感覚——あの時と一緒に……）」

落ちながら、昔の事を思い出す。

かつて、感じた感覚と同じ。

違うのは、落ちる場所が地面という事。

猫を抱えたままでは受身も碌に取れない。

何よりかなりの高さだ。

骨折程度では済まないかもしれない。

「（死んじゃうのかな……）」

地面はすぐそこまで迫っている。

——あの時の事を思い出す。

あの時は、助けて貰った。

だから、生きていられる。

また、あの時みたいに助けは来るだろうか？

「（——助けて、“お兄ちゃん”）」

地面にぶつかる、正にその瞬間だ。

ふわり、身体が浮く様な感覚に囚われる。

痛みは無い。

つまり、激突していないという事だ。

閉じていた瞼を開くと、そこには——。

「何をやっているんだ、お前は……」

真白いコートを羽織った、赤い髪の子。

自分を抱きかかえる様に立つ。

息を切らしながら、自分を見つめている。

記憶喪失の居候、シオン・ディアスその人だ。

だが、アンリの目に彼は映っていない。

彼女の目に映っていたのは――。

「お兄……ちゃん……」

「――!?」

子供の頃に、自分を助けてくれた恩人の姿。

シオンに、彼の姿を重ねていた。

やがて、何処か安心した様な顔で意識を手放した。

「アン！」

「大丈夫っスか!？」

後ろから、リナとジェイが駆け寄ってくる。

「無事だ。どうやら気を失ったらしいが……」

「良かった……。お昼食べようと公園に来たら、アンが木から落ちてるなんて……」

「心臓に悪いっスよ。早く病院に」

「ああ、そうだな……」

アンリを抱きかかえたまま、頷くシオン。

心なしか、顔色が優れない。

「旦那？どうしたんスか？」

「いや、何でもない……」

シオンの頭の中に、先ほどのアンリの言葉がこびり付いていた。

——お兄ちゃん。

何故、その言葉が引っ掛かるのだろうか？

疑問を感じながらも、病院へと足を運んだ。

第9話 初仕事と落ちる少女（後書き）

なかなかストーリーが進みません（汗）。
そろそろ、警備隊編を混ぜようかと考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3420v/>

R E D

2011年12月3日16時51分発行